

令和元年5月25日(土)～6月10日(月)

第152回 鶴見大学図書館貴重書展

日本近世文学学会大会開催記念展示

江戸の 出版と

写本の 文化

〔会場〕 鶴見大学図書館 1階 エントランス 入場無料

〔時間〕 8時50分～21時00分(土曜・18時00分まで) 日曜・祝日閉館

*6月9日(日)は展示スペースのみ開館(9時30分～16時30分)。

【主な展示品】

契沖自筆『万葉代匠記序文』 『御馬印』 古活字版『寛永行幸記』
近衛信尹筆『伊勢物語』 『詠歌口伝書類』 (古今伝授切紙)
『源氏物語』 (表紙裏に古活字版) 『狂歌師扇面寄合書』
『大坂物語』 『西鶴名残の友』 赤本『五百八十七曲』 『古契三娘』
『和漢鼠合戦』 (上方草双紙) 『文武二道万石通』 『俊寛僧都嶋物語』
『鬼兒島名誉仇討』 『白縫譚』 (袋付) 仙果自筆『柳亭翁著書目録』 等

ご挨拶

このたび本学で日本近世文学会が開催されることを記念して、江戸時代の出版と写本の文化に焦点を当てた展示を企画いたしました。江戸時代に華ひらいた出版文化は、人々の娯楽や学芸などの営みに少なからぬ影響を与えましたが、一方で写本の営為も、書物文化のなかで大きな位置づけを占めていました。

そこで、本展示では9つのテーマのもと、江戸時代初期から幕末明治にかけて書写・刊行された典籍を取り上げました。展示品からは、素朴な色刷りから華やかな多色刷りへの変化、趣ある活字から精巧な彫りへの技術的変遷、時期や分野ごとに異なる魅力を放つ造本の美、あるいは名家による流麗な筆致や即興の書の持つ力などが感じられ、前近代の豊穡な書物文化の世界を垣間見ることができます。

また、鶴見大学図書館には、古今東西の貴重書が1万点以上収蔵されていますが、これらの蔵書は、本学教職員が心血を注ぎ歳月をかけて収集してきたものです。先達によって集積された古典籍は、研究のみならず、広く教育や社会貢献の場にも活用されてきました。定期的開催している貴重書展もその活動の一環です。

この展示を通して、一人でも多くの方に、幾星霜を経て本学に所蔵されるに至った古典籍それ自体が醸し出す魅力を、肌で感じていただくことができれば幸いです。

2019年5月

第152回貴重書展担当者一同

目次

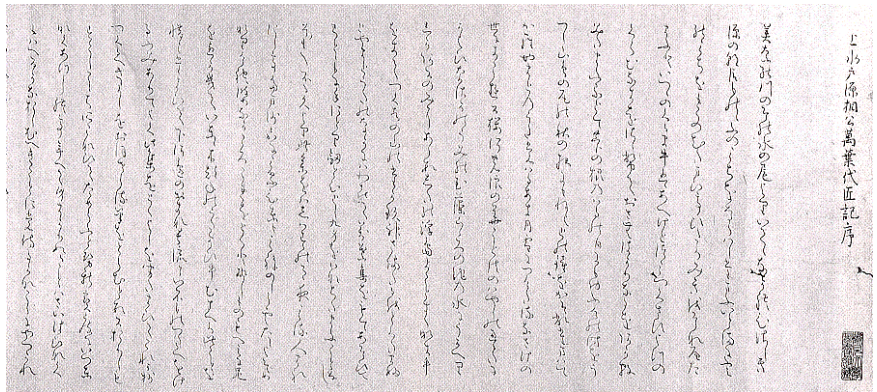
I 契沖と鶴見大学01 頁	VI 初期草双紙と黄表紙・洒落本16 頁
01 『万葉代匠記序文』(契沖自筆)	16 『五百八十七曲』(赤本)
02 『古今和歌集』(契沖筆)	17 『和漢鼠合戦』(上方版草双紙)
03 『土佐日記』(契沖書入)	18 『扱茂其後白髪公時』
04 『〔契沖書簡〕』	19 『蜀魂三津啼』
II 初期色刷と表紙裏の世界04 頁	20 『文武二道万石通』(寛政の改革物黄表紙)
05 『〔御馬印〕』	21 『古契三娼』(初版)
06 『源氏物語』(表紙裏に古活字)	22 『古契三娼』(改修後印本)
07 『源氏物語』(表紙裏に古活字)	VII 江戸読本と半紙本型草双紙20 頁
III 古活字版と料紙の意匠07 頁	23 『俊寛僧都嶋物語』
08 『〔寛永行幸記〕』(古活字版)	24 『鬼兒島名誉仇討』(半紙本型草双紙)
09 『詞花和歌集』(色替料紙)	25 『緞手摺昔木偶』
IV 公家の典籍09 頁	VIII 長編合巻の造本美22 頁
10 『詠歌口伝書類』(古今伝授切紙)	26 『修紫田舎源氏』
11 『伊勢物語』(近衛信尹筆)	27 『白縫譚』(袋付)
12 『源氏物語』(伝竹屋光忠等筆)	IX 集うたのしみ／遊びの文芸23 頁
V 松会版と西鶴本12 頁	28 『源氏物語双六』
13 『大坂物語』(松会版)	29 『〔狂歌師等扇面寄合書〕』
14 『世間胸算用／大晦日ハ一日千金』	凡例・担当者一覧25 頁
15 『西鶴名残の友』	

I 契沖と鶴見大学

01 『万葉代匠記序文』 契沖著 卷子1巻1軸〔元禄元年[1688]頃〕写(自筆)

* 本学名誉教授池田利夫先生寄贈本。

白茶色地に桐葉を織り出した
緞子表紙。見返しは金銀砂子散
らし。外題なし。内題「上水戸源
相公万葉代匠記序」。



楮紙(29.9×97.3 糎)。『契沖全集』1巻に翻刻される同内容の円珠庵本は、本書よりもやや小さい。円珠庵本は契沖仮名遣いを用いているのに対し、展示品は定家仮名遣いを用いていることが注意される。円珠庵本と比較すると、本書はその前段階の本文を有する。水戸の学者で契沖に傾倒していた安藤為章[1659-1716]の『年山紀聞』によれば、「元禄はじめのころの作」とあり、成立はそれによった。

ところで、『万葉代匠記』には初稿本と精選本とがあり、前者は貞享4年[1687]頃、後者は元禄3年[1690]年に成立したとされる。そもそもは下河辺長流が水戸の徳川光圀から委託された『万葉集』の注釈であったが、長流が病のため、契沖が引き継いで完成させたとされる。しかし、『万葉代匠記』の起稿は、光圀の依頼をも遡るとされる。また、『万葉代匠記』の序文は、精選本とともに水戸へ渡ったものと考えられるが、円珠庵に一通と本書とがそれぞれ自筆として存する。控えとして写し置いたのであろう。なお、本書は本学名誉教授池田利夫氏の寄贈本である。(加藤)

【参考文献】池田利夫「万葉代匠記の起筆年次」(『文学』1979年)、高田信敬解題『和歌と物語——鶴見大学図書館蔵貴重書80選——』(凡例参照)

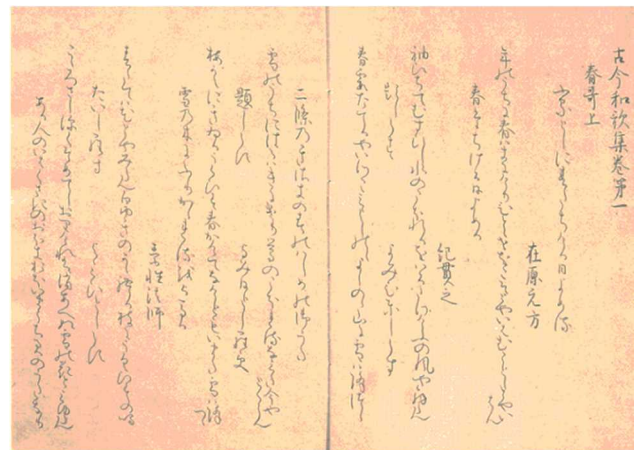
02 『古今和歌集』紀貫之等撰 列帖装2帖〔天和・貞享[1681-88]頃〕写(契沖筆)

* 文化元年[1806]3月、賀茂季鷹鑑定識語。

極札付(上田秋成の極欠)。

定家仮名遣を使用。

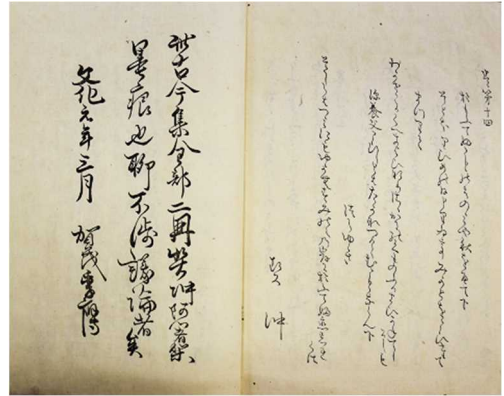
紺地に黄と白で唐草花菱を織り出した緞子表紙(24.9×19.1 糎)。見返しは金切箔・砂子を蒔いた斐紙。本文料紙は斐紙。毎半葉10行歌1首書、詞書3字下げ。伝本系統を記した奥書がなく、具体的な底本が何であったかはわからないが、流布本である貞応本系の本文を有する。下冊末に「此古今集全部二冊、契沖阿闍梨墨痕也、聊不抄議論者矣 文化元年三月 賀茂季鷹」と鑑定識語があり、賀茂季鷹[1752-1841]の記すように、契沖の筆跡と考えられる。



本書でまず注意すべきは、契沖仮名遣いではなく、定家仮名遣いを用いていることと、文化9年に清水浜臣門の川島蓮阿が本書の模刻本を刊行していることである(参考1)。この模刻本は本書をほぼ忠実に再現しているが、真名序を省略し、底本の仮名遣いを契沖仮名遣いに筆跡を似せて改め、さらには本文末に底本にはない契沖の署名まで入れている。この時代より少し前から、契沖関係の書籍が次々を刊行されていたこともあり、やはり定家仮名遣いのみでは具合が悪かったのであろう。それゆえ、文

字を契沖のものに似せて改竄したのである。なお、模刻本の跋文によれば、本書にはかつて上田秋成^{うへだあきなり}による極めが付されていたとのことである。契沖の書写本で伝わるものは、簡素な料紙を使用し、袋綴であることが多いため、本書のごとき緞子表紙を付した列帖装の豪華本は珍しい。学術目的以外で作成されたものと考えられる。(加藤)

[参考1] 『古今和歌集』^{こぎんわかしゅう} 紀貫之^{きのつらゆき}等撰 大本20巻2冊
文化9年[1812]刊(京、吉田屋新兵衛・吉田四郎右衛門)
*契沖自筆本の模刻。真名序を欠き、契沖^{けいしゅう}仮名遣に改める。原本^{けいしゅう}にない契沖署名を本文末に補入。

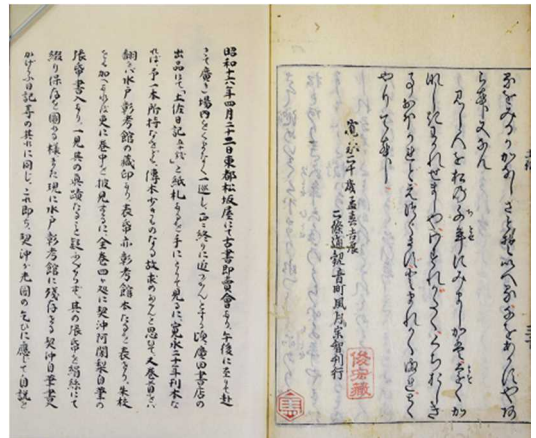


模刻本に記された川島蓮阿^{かわしまれんあ}の跋文により、底本である契沖筆の『古今集』は、この時本居宣長^{もとおりのりなが}門の林国雄^{はやしくにお}が所蔵していたことや、上田秋成による極めが付されていたが、この時にはすでに失われていたことがわかる。図版からは、底本にはない「契沖」という署名が、本文末に補われていることがわかる。ここが本文の最後に当たらないうえに、自著ではない書写本に署名のみを施すのは異例であり、やはり版面には不自然さを感じる。(加藤)

【参考文献】鶴見大学文学部日本文学科研究室編『契沖筆 古今和歌集』(鶴見大学、1986年)

03 『土佐日記』^{とさにっき} 紀貫之^{きのつらゆき}著 大本2巻2冊 寛永20年[1643]刊(京、風月宗智)^{ふうげつ そうち}
*契沖書入、川瀬一馬^{かわせかずま}旧蔵。

白茶無地の表紙に「土佐日記 全」とある刷題簽を付す。題簽には水戸彰考館^{みとしょうこうかん}の印文末詳雲形角印を押し、さらに第1丁オ右下に「彰考館」の瓢形朱印^{ひさごがた}を押す。27.0×17.6 糎。刊記には「寛永二十歳(孟春吉辰) / 二條通観音町風月宗智刊行」とあり。末尾には新たな丁が補入され、そこに川瀬一馬氏が本書を入手した経緯などが記され、興味深い。第2丁オと第15丁ウに各1枚、第27丁ウに2枚(ただし元1枚)の契沖筆勘考^{かんとこう}の紙片を、それぞれ糸で縫い付ける。



契沖は依頼のあった『万葉代匠記』のほかにも、自著を徳

川光圀に進じたが、それらの補訂を含め、古典全般に関する新しい見解を、水戸へ随時書き送っていた。それらの多くは彰考館において冊子や卷子本にまとめられたが、一部は彰考館にかつて所蔵されていた本書のように縫い付けられた。勘考の内容は、三手文庫蔵契沖自筆書入同版本とほぼ一致する(加藤)。

【参考文献】池田利夫解題『古典籍と古筆切』(凡例参照)

04 『契沖書簡』^{けいしゅうしょかん} 善右衛門^{かいほうじやくちゅう}(海北若冲)宛 軸装1軸

*海北若冲[1675-1752]は契沖の高弟。『契沖全集』第16巻(遺文・書簡集)収録。

宛名の善右衛門は海北若冲[1675-1752]のこと。若冲は、今井似閑、兄の野田忠肅とともに、契沖の高弟として知られる江戸中期の国学者である。契沖の説を整理して、『万葉集師説』や『万葉集師説類林』を刊行した。本姓は野田、名は千之、通称は善右衛門という。別号に琴柏、家集に『琴柏集』がある。本書簡は、契沖が詠んだ年内立春の歌の注釈を、おそらくは若冲の要請をうけて送ったものであろう。この歌は『漫吟集類題』^{まんぎんしゅうるいだい}巻1に収録される。『契沖全集』に書簡の翻刻が載るものの、解題には所蔵者は不明と記されており、全集刊行後に本学に収蔵されたことがうかがえる。

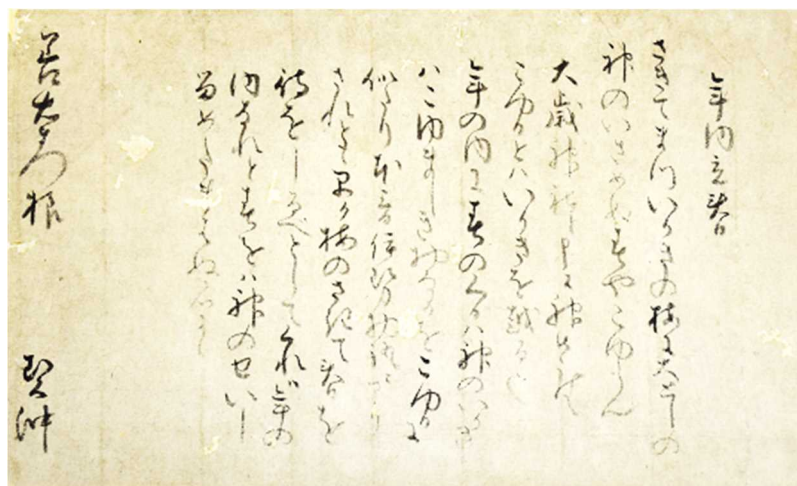
【翻字】*「／」は改行

年内立春

さきてまついがきの梅に大としの／
神のいさめぬ春やこゆらん
大歳神社と申す神御座候。／こゆると
は、いがきは越る也。」年の内に春の
くるは、神のいがき／はこゆまじき物
なるをこゆるに／似たり。本歌、伊勢
物語にあり。／されども早く梅のさき
て、春を／待をしるべとして、くれは
年の／内なれど、春をば神のせいし／
留めたまはぬ心に候。

善右衛門様

契沖



【参考文献】久松潜一編『契沖全集』第16巻（岩波書店、1976年）

【参考2】『契沖全集書簡凡例草稿』^{けいちゆうぜんしゅうしょくはんはんれいそうこう}久松潜一著^{ひさまつせんいち} 200 詰原稿用紙 11 枚 【図A】

昭和 51 年 [1976] 頃写（自筆） * 契沖書簡集凡例・新編契沖遺文凡例・凡例の草稿。

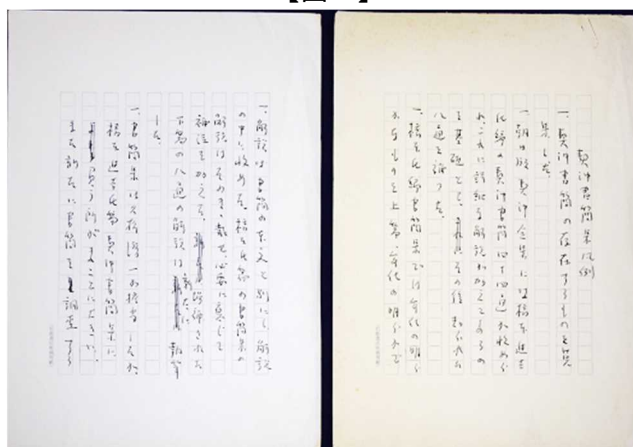
【参考3】『契沖の書簡に就いて』^{けいちゆう}久松潜一著^{ひさまつせんいち} 200 詰原稿用紙 10 枚 【図B】

昭和 9 年 [1934] 頃写（自筆） * 『上代民族文学とその学史』（大明堂書店、昭和 9 年刊）所収、
「契沖の書簡について」の原稿。

参考展示とした 2 点は、^{ひさまつせんいち}久松潜一氏の自筆原

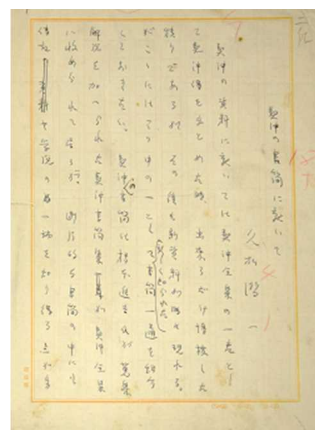
【図A】

稿である。図Aは岩波書店製の原稿用紙に書かれ、編集者による改訂の跡も見られる。本学は現在、多数の貴重書を所蔵するが、そのうち日本古典籍の蒐集の歴史は、昭和 42 年[1967]に始まる。昭和 38 年[1963]に文学部が開学し、その 4 年後に現在のキャンパスへ校舎とともに図書館が移転した。その後から、古典籍は始まった。はじめは、初代文学部長の久松氏を中心に、和歌や連歌の写本、契沖・宣長などの国学者の資料が徐々に集められた。契沖の資料が収集の対象となったのは、久松氏が『契沖全集』の編者であったためである。また、鶴見大学の蔵書のなかでも、とりわけ有名であるのは、『源氏物語』のコレクションであるが、これは学内に紫式部学会の事務局が置かれたことが契機となった。一からの蒐集であったため、限られた予算を有効的に活用するには、相当な苦勞があったはずである。およそ半世紀で集められた蔵書を眺めるに、蒐集にかかる教職員の思いと、先達の確かな選書眼に畏敬の念を抱く。



【図B】

【参考文献】池田利夫「本学図書館の源氏物語関係書蒐集」（『特定テーマ別蔵書目録集成 3 源氏物語』鶴見大学図書館、1995 年）、同「鶴見大学図書館蔵和漢古典籍の蒐集と展観」（『古典籍と古筆切』凡例参照）、高田信敬「古典籍展示略縁起」（『和歌と物語』凡例参照）



II 初期色刷と表紙裏の世界

05 『御馬印』半紙本れいよう葉れいよう37葉〔寛永〔1624～43〕〕刊 *色刷

多色刷りが一般的に見られるようになるのは、江戸時代中期の錦絵（浮世絵）の登場前後のことであり、それ以前は朱と墨の二色刷か、それに藍を含めた三色刷を施すものが数点確認されるにとどまる。それゆえ、この『御馬印』はひととき異彩を放つ。内容は將軍や大名の旗指物や兜などを多色刷りで列挙した図鑑であるが、ほぼすべての丁に墨・朱・黄・白・青の五色刷りが用いられ、さらに金・銀・薄墨・緑・赤・茶などの手彩色を施すところもあり、その豪華さは江戸初期において他に類を見ない。

鶴大本は1葉（23.7×29.4 糎）ごとになっているが、【図A】で示したように、全ての料紙の左右両端に、等感覚で5つの穴が空き（太い矢印の箇所）、それより少し外側に大きめの穴が2つずつ上下に確認できる（細い矢印の箇所）。5つの穴は綴じ糸を通すためのものであり、2つずつ上下に空いた穴は紙縫こよで本紙を綴じるための穴であることから、本資料は当初袋綴ふくろとじの冊子本であったことがわかる。なお、37葉の内訳は、巻1が13葉（第11・18・22～24・27～34丁）、巻4が13葉（第7・9・16・18・20～24・26・28・30・31丁）、巻5が2葉（第8・29丁）、巻6が9葉（第11・13～15・19・23・26・27・33丁）である。

この『御馬印』の多色刷りの伝本は、国立国会図書館（全6巻）・早稲田大学図書館（巻1・4）・宮内庁書陵部（巻1）・天理図書館（巻3）・大東急記念文庫（巻5）など少数にとどまり、しかも国会図書館以外には完本を確認できない。また、これらはすべて巻子本の装訂となっているにも関わらず、各料紙の中央に「一ノ 十一」のように巻数と丁数表示があり、版木そのものは冊子本を想定して彫られたことを示していた。つまり、鶴大本によって、初期に刊行された袋綴冊子本の現物が初めて確認できたことになる。

また、国会本と鶴大本とを比較すると、ところどころ配色や手書きの模様に違いが見られる。なかでも注目したいのが、真田信吉まんだしんきちの小馬印こまじるしである。鶴大本では軍配型ぐんぱいに描かれているが（図

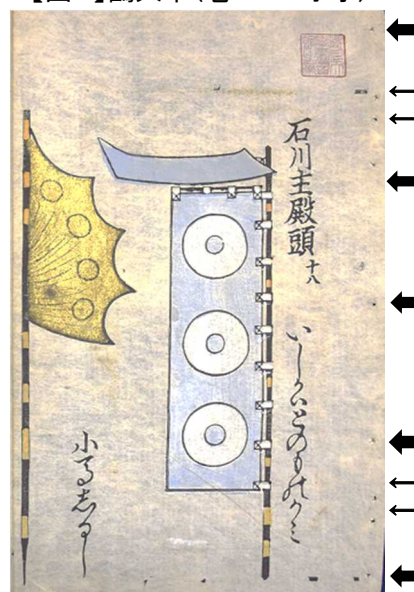
B）、国会本では瓢箪型ひょうたんとなっており（図C）、早大本でも瓢箪型で描かれている。『御馬印』には単色刷りの後印冊子本が存在するが、そちらでも国会本等の瓢箪型を踏襲している（図D）。ここから、鶴大本は国会本等の巻子本の伝本より先行する可能性が考えられる。しかし、鶴大本には国会本には残る巻数が欠ける箇所があるなど、先後については即断できない。今後、さらなる検討を要する。（加藤）

【図B】鶴見大学図書館蔵（巻1第27丁オの部分） 【図C】国立国会図書館蔵（同巻同丁の部分）

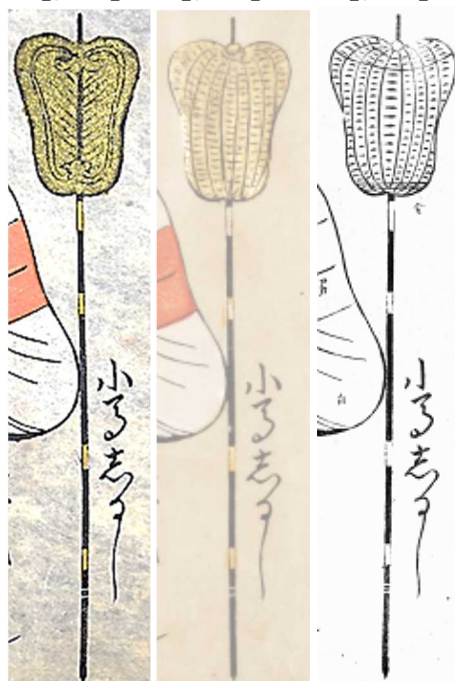
【図D】国文学研究資料館蔵（ヤ9-310-1～4）<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200010484/viewer/30>

【参考文献】岡崎久司「多色摺源流考証」（『江戸文学』第25号、2002年6月）、堀川貴司・伊倉史人解題『第119回貴重書展 見る・読む・比べるII——ドキュメンテーション学科による古典籍へのアプローチ——』（鶴見大学図書館、2008年）

【図A】鶴大本（巻1・23丁オ）



【図B】 【図C】 【図D】



06 『源氏物語』紫式部著 列帖装5帖〔江戸前期〕写

*薄雲・篝火・鈴虫・竹河・手習存。表紙裏に古活字版『源氏物語』。

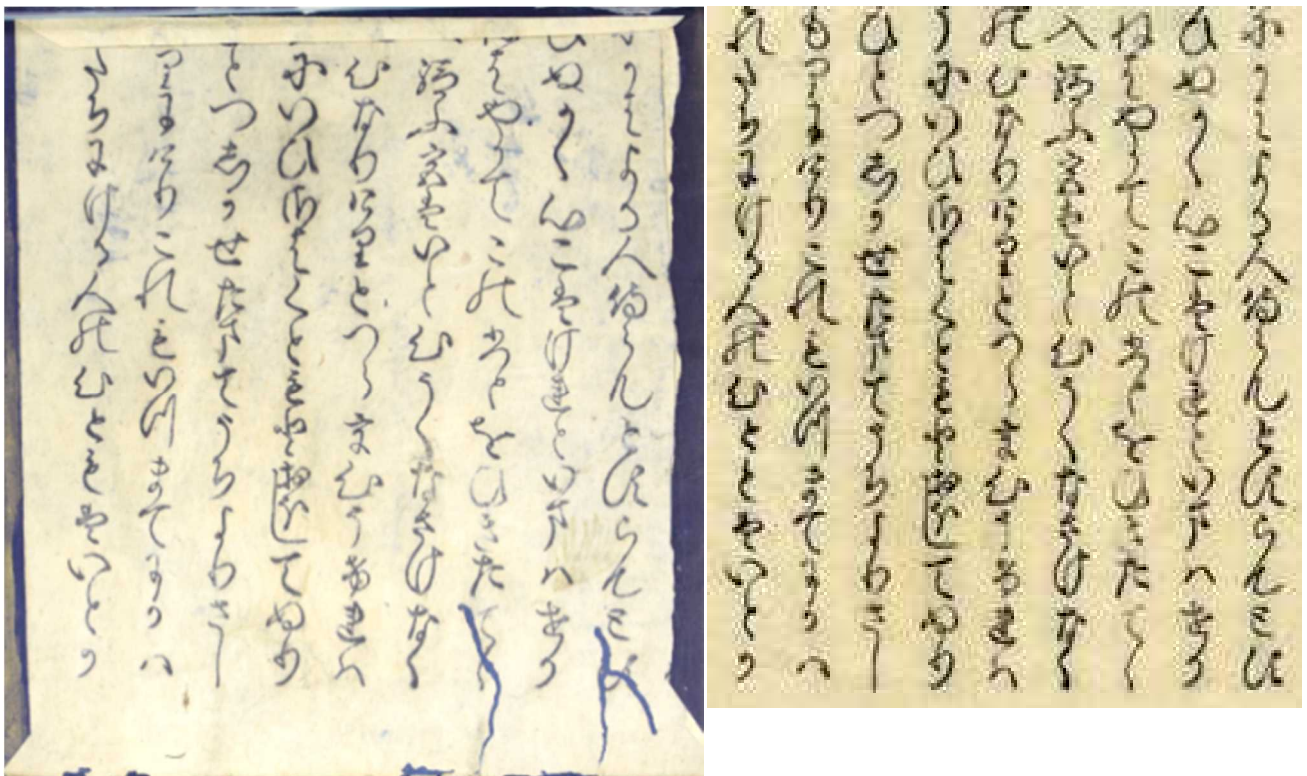
本学図書館にはさまざまな『源氏物語』の写本・刊本が所蔵されているが、今回は古活字版の反故が表紙の芯として使われた近世写本に注目する。古活字版とは安土桃山時代末期から江戸時代初期にかけて出版された活字印本を指す。やがて出版が盛んになると、より大量生産に向いている整版（版画のように、版木1枚ずつに文字や絵を彫る印刷手法）が主流となって古活字版は使われなくなったため、古活字版は初期の刊本として貴重である。

和本の表紙は芯となる紙を必要とするが、芯には先行する本の反故が転用されることもあった。特に江戸時代初期の刊本では珍しくないが、展示中の『源氏物語』は江戸前期に書写されたと思われる写本で、表紙の芯に古活字版『源氏物語』の反故が使われた例である。書誌を記す。紺地金銀泥下絵表紙16.7×横18.1糎。本文料紙、斐紙。見返し、本文共紙。表紙中央に金泥下絵題簽12.8×2.7糎。每半葉11行。

鈴虫は見返しが剥がれており、表紙の芯として古活字版『源氏物語』の反故が見える（図A）。現在、知られている『源氏物語』の古活字版は、慶長刊本・伝嵯峨本・元和9年[1623]刊本・無刊記元和刊本・2種の寛永刊本で、この反故は無刊記元和刊本の夕霧巻52丁ウラ（図B）と一致する。

【図A】

【図B】



【図A】本学図書館蔵 鈴虫の表紙の芯に使われた反故（左右を反転して掲示）。

【図B】九州大学附属図書館蔵 無刊記元和刊本の夕霧。

※九大コレクション (<http://hdl.handle.net/2324/411244>) による。

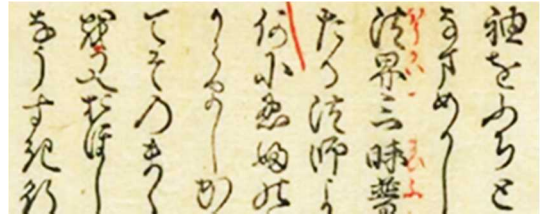
次に手習に使われた反故は無刊記元和刊本の葵24丁オモテと対応するが、完全には一致しない点が注目される。すなわち、5行目の「忍」、7行目の「の」の活字が明らかに異なっているうえ、図Cの3行目「〔三〕界〔昧〕」は文意不通の誤植で、本来は図Dのように「法界三昧」とあるべきところである。無刊記元和刊本で誤植が訂正されたのだとすれば、反故の方は無刊記元和刊本に先行する異植字版といえよう。現在、これに相当する伝本は知られていないため、たとえ分量はわずかであっても、貴重な資料である。（田口）

【図C】



【図C】 本学図書館蔵 手習の表紙の芯に使われた反故。

【図D】



【図D】 九州大学附属図書館蔵 無刊記元和刊本の葵。※前掲の九大コレクションによる。

【参考文献】 渡辺守邦『表紙裏の書誌学』（笠間書院、2012年）、高田信敬「表紙ウラの『源氏物語』」（年報（鶴見大学源氏物語研究所）2 2012年3月）

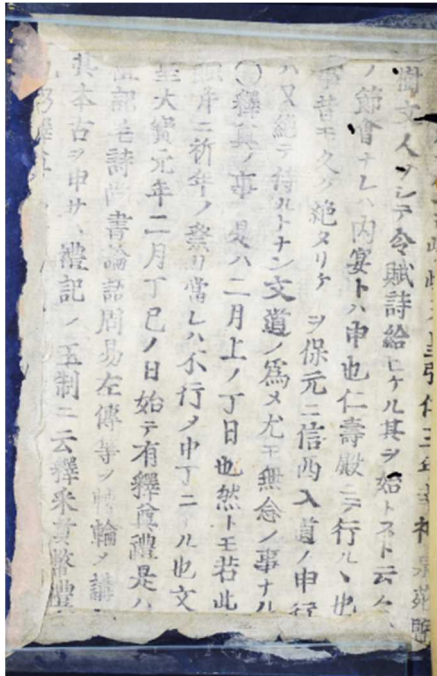
07『源氏物語』紫式部著 列帖装11帖〔江戸前期〕写

*完本として紅葉賀・少女・篝火・梅枝・浮舟の5帖存、残簡として〔胡蝶〕・若菜上下・野分・幻・〔宿木〕の6帖存。越国文庫旧蔵。表紙裏に古活字版『太平記賢愚抄』。

06と同様に、古活字版が表紙の芯に利用された『源氏物語』の写本。紺地金銀泥下絵表紙24.4×17.7糎。本文料紙、斐紙。見返し、本文共紙。毎半葉10行。越前松平家旧蔵。本学には残簡を含めて11帖、日本大学に1帖（うすぐも）のツレが所蔵される。なお、本学にはこれと別に越前松平家旧蔵の枅形本49帖（ははきぎ・うつせみ・あかし・はつね・てならい）も所蔵されている。

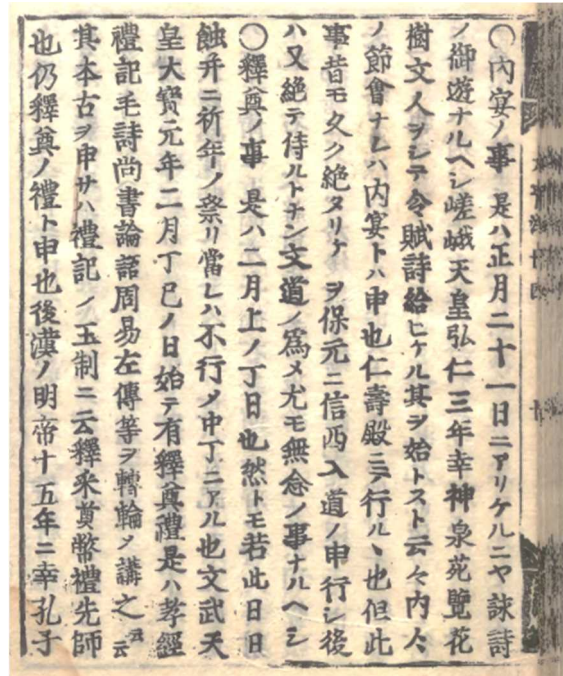
展示資料は紅葉賀で、その表紙の芯には『太平記賢愚抄』下23丁ウラの反故が使われる。『太平記賢愚抄』は、著名な軍記物語『太平記』の注釈書で、天文12年[1543]に「江州住侶」の「乾三」なる人物が著した旨の奥書を持つ。写本は知られず、古活字版のみが現存する稀覯本。反故に使われた箇所は『太平記』巻24の注で、正月の内宴、2月の釈奠という年中行事について説明する。（田口）

【図A】



【図A】 本学図書館蔵 紅葉賀の表紙に使われた芯（左右反転して掲示）

【図B】



【図B】 国立公文書館（167-0112）蔵 慶長12年[1607]医徳堂版

※画像の引用は、国立公文書館 デジタルアーカイブによる。

(<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F100000000000043042&ID=M2016062215570932709&TYPE=&NO=>)

Ⅲ 古活字版と料紙の意匠

08 『寛永行幸記』〔烏丸光広〕著 卷子1巻1軸 〔寛永4年〔1627〕頃〕刊〔京都〕

*古活字版、絵活字手彩色。上巻存。第二種口本。

寛永3年〔1626〕9月の後水尾天皇による二条城行幸について記した『寛永行幸記』は、古活字版・古活字版覆刻整版・写本などがあり、このうち古活字版は絵も活字のように組んで印刷する絵活字（絵駒とも）と呼ばれる手法を多用することで知られる。また、版を何度か組み直しており、その活字や絵活字の種類や組み合わせによって、第1種本、第2種イ本、第2種口本、別種本の4種類に大別されている。本学は、このうち第2種口本の上巻1軸、別種本の上巻1軸、別種本の中巻1軸の計3点を所蔵する。本学所蔵本の書誌情報は以下の通りである。

- (1) 上巻(第2種口本)1軸 〔寛永4年頃〕刊〔京都〕 鶴見大学図書館蔵 *展示品
中・下巻欠。総紙数29枚。後補柳色表紙25.6×26.0糎。左肩題簽「寛永三年九月／御奉図巻上」。彩色（主に黒・白・朱・緑青・黄。本文17紙から22紙は朱色のみ）は後人によるものか。最終丁書入れ有り。
- (2) 上巻(別種本)1軸 〔寛永年間〕刊〔京都〕 鶴見大学ドキュメンテーション学科蔵
中・下巻欠。序文・二条城図欠。現存総紙数27枚。朽葉色花丁子と葵の織出表紙（後補）25.8×27.3糎。題簽なし。見返しは金紙に縹色葵唐草紋様。
- (3) 中巻(別種本)1軸 〔寛永年間〕刊〔京都〕 鶴見大学図書館蔵
上・下巻欠。現存総紙数15紙。桐箱有り。縹色四つ桜紋様表紙26.2×20.6糎。左肩題簽有り（文字は確認できず）。最終紙末に刊行地「あいのまち通高田町」有り。

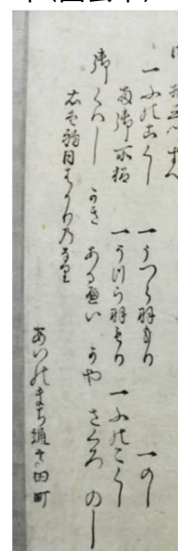
第2種本までの牛車と牛の絵活字には、絵活字の途中に繋ぎ目のあるものが含まれる。例えば図Aでは、黒牛の腰あたりに絵活字の連結部があり、牛車とそれを引く黒牛の後半身と、黒牛の前半身の絵活字を合わせていることが分かる。別の牛車と牛の絵活字にも同様の細工が見られる一方で、より大きな牛車と牛の絵活字には分割が見られないことから、牛車と牛の組み合わせや従者の数などを



【図A】第二種口本(国会本)

変える可能性を考慮して、このような絵活字が作られたのだろうか。しかし、第2種口本を覆刻した別種本の絵活字には同様の特徴が見られなくなる。これは、牛車の種類とそれを引く牛の絵活字はつねに同じ組み合わせであり、牛の半身を組み合わせる必要がなかったためであろう。

ところで、別種本としては、安田文庫本（焼失）、栗田元次〔1890-1955〕旧蔵本（所在不明）、国会図書館本の3本が知られているが、近年、現物を確認できるものは国会本のみとなっていた。本学所蔵本によって新たに2本の別種本が現存することが分かった。別種本の国会本（完本）と鶴大本（上中巻）を比較したところ、国会本の中下巻、鶴大本の中巻の最終紙には刊行地が「あいのまち通高田町」とあった（図B）。ここから、中巻と下巻の最終紙に刊行地が記載されることは別種本の特徴の一つと言える。しかし、栗田本は中巻にはなく、下巻にのみ記載されるという。さらに、紙数も国会本・鶴大本の中巻が15紙であるのに対し、栗田本は18紙とあり、第2種本の紙数と一致する。つまり、所在不明となっているものの、残された書誌情報から、栗田元次旧蔵本の中巻は別種本ではなく、第二種イ本・口本のいずれかであったと推察される。（鈴木）



【図B】鶴大本

【参考文献】間島由美子『寛永行幸記』について——4種の古活字版とその覆刻整版と写本——

（『参考書誌研究』第55号、2001年）

09 『詞花和歌集』 藤原顕輔撰 小本10巻1冊 [江戸前期] 刊 (無刊記)

* 五色の色替り料紙。『二十一代集』の内。

本書は小本『二十一代集』のうち的一本であるが、五色の色替り料紙を用いており極めて珍しい。本学にはこの他、ツレの『続千載和歌集』(上下2冊)も所蔵する。刷りは両書とも良い。

色替り料紙を用いた版本の早い例は、[参考4]で掲げたような嵯峨本が著名であるが、整版の歌書としては『二十一代集』のほか、嵯峨本覆刻整版『伊勢物語』(〔元和・寛永頃〕、大本2冊)、『古今和歌集』(〔江戸初期〕刊、小本1冊)、『伊勢物語』(承応2年[1653]刊、小本2冊)、『源氏物語』(万治3年[1660]刊、横本30冊)が報告される。江戸時代の初期から前期は、写本から版本へと書物の中心が移行する時期とされるが、その頃にこのような色鮮やかな料紙を用いた歌書が刊行されたのは、写本のごとき上質な歌書を整版で目指したためであろうか。

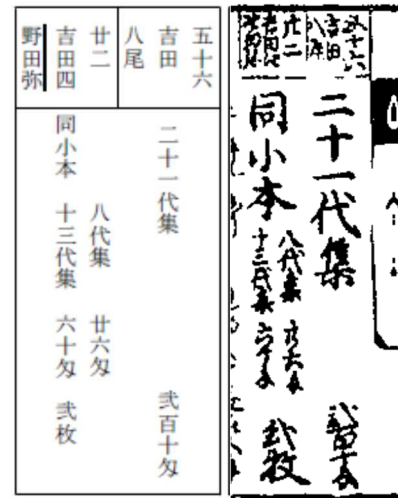
さて、無刊記の小本『二十一代集』は、正保版には及ばないものの、江戸時代を通じて流布したことで知られる。書型が中本であるものも多いが、管見の限りでは江戸前期に刊行されたものは小本であり、その後中本へと移行していく。中本の方が書き込む余裕があり、勉学に向いていたからであろう。江戸後期になると刊記を持つ本も現れるが、江戸前期から無刊記の状態でも永らく出版が続けられた。広告などの記述から、従来、吉田四郎右衛門が単独で開版したものと考えられてきたが、元禄9年[1698]に刊行された『〈増益〉書籍目録大全』に「吉田四／野田弥」とあることから(図A)、京都の野田弥兵衛も当初から刊行に携わっていたと考えられる。同様に正保版『二十一代集』も吉田四郎右衛門と八尾助左衛門が開版したものと推察される。小本と大本の先後については、大本の方が先に出されたのであろう。その理由のひとつに、正保版の誤りをそのまま小本が引き継いでいる箇所があることなどが挙げられる。よって小本『二十一代集』の刊行は正保4年[1648]以降のことであろう。詳細は別稿に譲る。(加藤)

【図A】元禄9年[1698]河内屋喜兵衛刊『〈増益〉書籍目録大全』(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』井上書房)

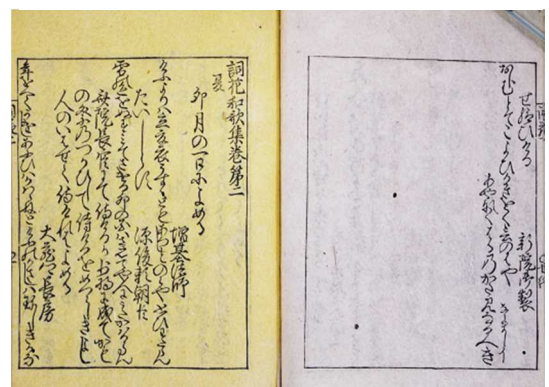
【図B】鶴見大学図書館蔵『詞花和歌集』巻2の巻頭

【参考文献】神作研一「江戸の出版文化」(『和語表記による和様刊本の源流[論考篇]』武蔵野美術大学美術館・図書館、2018年)

【図A】

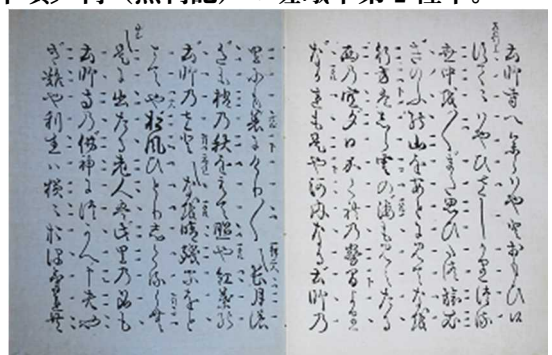


【図B】



[参考4] 『観世流謡本 道明寺』 列帖装1帖 [慶長中頃] 刊 (無刊記) * 嵯峨本第2種本。

嵯峨本観世流謡本は「光悦謡本」と呼ばれ、装訂や版式等によって、特製本・上製本・色替り本・袋綴別製本・袋綴並製本などに分類される。異植本・異版本も含めると、さらに20種近くとなるが、このうち特製本・上製本・色替り本の3種が、いわゆる「嵯峨本」(近世初頭、角倉素庵と本阿弥光悦が印行した、木活字による書物)であると大方には見なされる。このうち、色替り料紙の本を、高安六郎氏や川瀬一馬氏は第2種本とする。(加藤)



IV 公家の典籍

10 『詠歌口伝書類』(古今伝授切紙) 継紙8巻11通 [江戸初期] 写 *三条西家に伝来か。

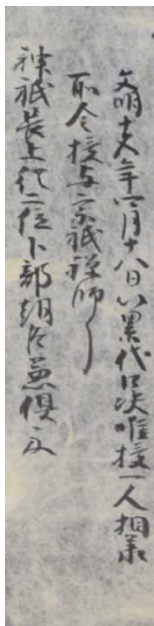
表紙なし。縦約14糎。本文料紙、斐楮交漉紙。古今伝授の切紙を集成したもので、本来は8巻であったが、一部が剥離して分離したため現在では11巻のように見える。

文明3年[1471]、東常縁は『古今和歌集』を宗祇に講釈し、宗祇がその内容を『両度聞書』に整理した一方、秘伝は切紙(紙片)の形でまとめた。その後、常縁が宗祇に伝授の証明を与えた。これを古今伝授と呼ぶ。

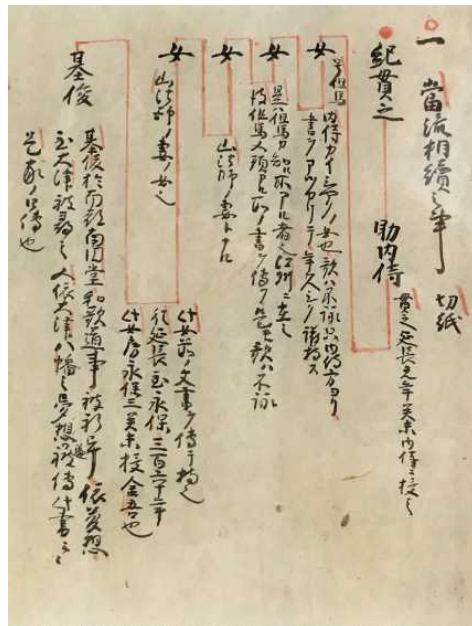
伝授の内容は和歌の解釈を中心とするが、秘伝的・神秘的な要素も強く、卜部神道との結びつきも認められる。現在では牽強附会に見える説も多いが、後世に与えた影響は極めて大きく、連歌師の牡丹花肖栢や宗碩、公家の近衛尚通などへ相伝されて次第に権威を高め、江戸時代には皇室へも伝授された。さまざまな秘伝のうち、どこまでを伝授するかは伝授の相手によって変えられていた。その総体を受け継いだのは、古典への造詣が深かった三条西実隆である。本資料はその三条西家に伝来した切紙類と考えられ、室町後期の古今伝授を研究するうえで重要な意味をもつ。

図Aは「神道口伝事」と題された切紙の奥書部分で、文明15年[1483]に吉田兼俱が宗祇へ相伝した旨が記される。従来、両者は相互依存的と考えられてきたが、兼俱の地位向上とともに、その関係性にも変化が生じたことを窺わせる資料である。図Bは「当流相續之事」と題された切紙で、伝授される秘伝が『古今和歌集』撰者の1人紀貫之に端を発するものとする血脈(系譜)である。(田口)

【図A】



【図B】



【参考文献】伊倉史人「鶴見大学図書館蔵『詠歌口伝書類』解題・翻刻」(鶴見大学日本文学会編『国文学叢録 論考と資料』笠間書院 2014年)、海野圭介『和歌を読み解く 和歌を伝える 堂上の古典学と古今伝授』(勉誠出版 2019年)

11 『伊勢物語』〔慶長初年頃〕写 (近衛信尹筆) 列帖装1帖

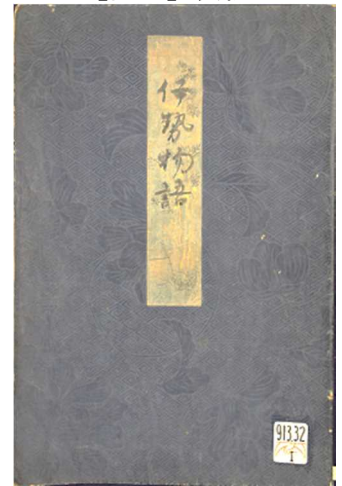
雷文繋ぎ地に牡丹唐草を艶刷りした原裝藍色紙表紙(30.3×20.3糎)を付す。表紙中央に金銀泥で下絵(17.0×3.5糎)が施された題簽を貼り、本文と同筆で『伊勢物語』と墨書される(図A)。見返しは本文共紙。料紙には厚手の斐紙を用いる。墨付68丁で、巻首に遊紙1丁あり。毎半葉10行22字前後、和歌は2字下げ2行書きを原則とするが(図B)、最後の業平辞世の歌「つみにゆく」は、散らし書き風

に書す(図C)。勸物(注記)はなく、巻末に「抑伊勢物語根源～」に始まる根源本の奥書と、「合多本所用捨也～」に始まる武田本の奥書を書写し、その末に「右両本奥追書加之畢」と記す。親本には奥書がなかったらしく、他本から写したことを伝える。なお、本文系統は武田本に近いとされる。

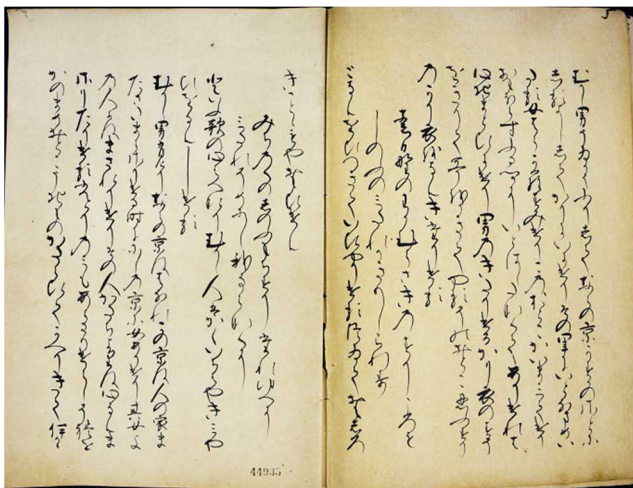
折紙や極札はないものの、筆跡から近衛信尹[1565-1614]の筆と考えられる。信尹は三藐院と号した安土桃山時代の公卿で、五撰家の筆頭、近衛家の第17代当主であった。歴代当主は娘を入内させ、皇室と浅からぬ関係にあったが、信伊は武家とも交流を持った。天正5年[1577]に元服した際、加冠の役をつとめた織田信長から諱の一字をもらったという逸話はよく知られる。直情かつ奔放な気質で、豊臣秀吉に閼白を奪われたうえに勸勤を蒙って、薩摩坊津に約3年間配流されたことがある。この出来事は彼の書へも影響を与えた。許されて帰京した後に、念願の閼白となっている。

和歌・連歌・絵画にすぐれ、ことに書道においては、御家流のひとつである道澄流を学び、上代様を基にして一派を樹立し、近衛流(三藐院流)の祖とされる。名家に生まれながら武家の周辺で育ち、天下人との関わりのなかで翻弄された信伊は、生まれながらの才気と風格に覇気が備わり、その気概は書に反映された。太い線と細い線を組み合わせた勢いのある筆線と、型にはまることのない闊達さが信伊の書の持ち味だが、本書にもその特徴がうかがえる。とりわけ、各章段冒頭に繰り返し出てくる「むかしおとこ」を、最初は「むかし男」と書いているが、次第に「無閑新於止古」「霧期使男」「六香子於東虚」「無嘉慈雄士孤」「無加之男」等とさまざまに書き分け、漢字と仮名の交ぜ書きにも工夫を凝らし、書に変化をつけている点や、巻末の堂々たる奥書はその書風をよく伝える。なお、本阿弥光悦や松花堂昭乗とともに寛永の三筆と称せられるが、信伊は実際には寛永以前に没している。(加藤)

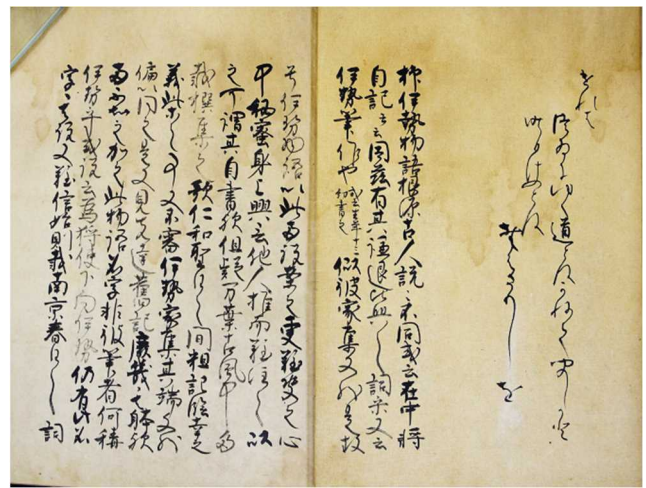
【図A】表紙



【図B】巻頭



【図C】業平の辞世歌(右端)



【参考文献】池田利夫解題『古典籍と古筆切』(凡例参照)、高田信敬解題『第117回貴重書展 伊勢物語——みやびの伝統——』(鶴見大学図書館、2008年1月)等、各貴重書展図録(凡例参照)

12『源氏物語』紫式部著 中本10巻10冊〔江戸中期〕写(伝竹屋光忠筆/早藤のみ伝油小路隆典筆)

*宇治十帖存。極札付。

縹・萌黄色網目紋様表紙19.8×13.7糎。表紙左肩に各巻名を打付書(総角は「角総」と表記)。内題なし。本文は毎半葉9行17字程度。和歌は改行・2字下げで書きはじめ、そのまま地の文に繋げる。和歌の冒頭には詠み人の名を略記する。全体にわたって朱引き・朱点あり。

夢浮橋の巻末に「此物語全部終了(此の物語、全部、終功了らぬ) / 光忠」という奥書があり、

元来は公家の竹屋光忠（寛文2年[1662]～享保10年[1725]）筆の揃本であったことが分かるが、現在は宇治十帖のみ存。また、早蕨の奥書「右さわらびの巻依所望／令書写畢（右、さわらびの巻、所望に依りて、書写せしめ畢んぬ）／権中納言隆典」によれば、早蕨のみ油小路隆典（貞享元年[1684]～延享3年[1746]）の書写である。彼は光忠とほぼ同時代の公家で、何らかの事情により早蕨のみが早くに散逸したため、隆典がそれを補完したと推される。光忠と隆典の真筆である旨を鑑定した古筆了音と川勝宗久による極札各1枚が附属する。

また、本学図書館蔵『源氏物語』54帖も光忠の奥書をもつため、[参考5]に挙げた。ほかに光忠の奥書を持つ写本として、いずれも天理大学附属天理図書館蔵の『竹馬狂吟集』・『園太暦』・『無名抄』・『宇治拾遺物語』が現存し、光忠筆という伝承をもつ写本としては國學院大學図書館蔵『寄合書源氏物語』の御法・幻・匂宮・紅梅・竹河・東屋・浮舟が知られる。しかし、すべてを同筆とは認めがたく精査を要する。（海野）

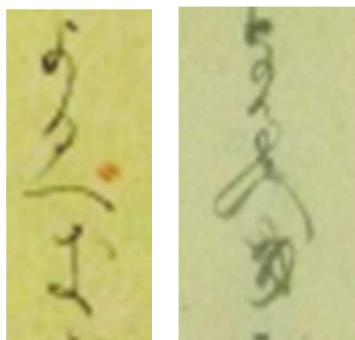
【参考文献】天理大学附属天理図書館編『天理図書館叢書 46 天理図書館稀書目録 和漢書之部第5』（同館、2010年）、國學院図書館 Digital Library「寄合書源氏物語 [貴 986-1010]」解説
<https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/genjiyorai986/etc/kaisetsu.html>

【参考5】『源氏物語』紫式部著 列帖装 54帖〔江戸中期〕写（伝竹屋光忠筆）*錯簡あり。

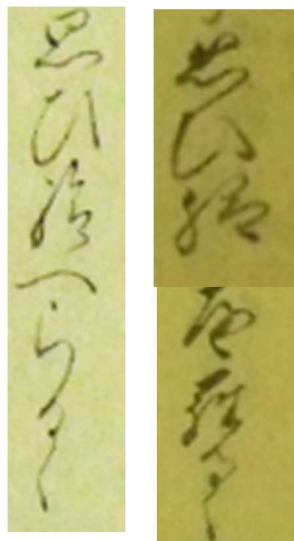
焦茶色宝 尽 紋様布表紙 22.8×17.8 糎。表紙左肩の金色題簽に各巻名を墨書。内題なし。本文は毎半葉 11 行 19 字程度。和歌は改行・2 字下げで書きはじめ、そのまま地の文に繋げる。夢浮橋（「須磨」の題簽を貼り誤る）巻末の奥書に「此源氏物語一部依／所望令書写畢（此の源氏物語一部、所望に依りて、書写せしめ畢んぬ）／三月下旬 藤光忠（花押）」とある。見返し中央に「村井氏蔵書」印あり。

さて、12 は早蕨が伝隆典筆、それ以外は伝光忠筆であったが、こちらは全巻一筆と見られ、奥書に従えば早蕨も光忠の書写となる。そこで両者の本文を比較すると、比較的珍しい本文を共有していることが分かる。たとえば、図Aは薫が中君と対面した帰り際に「またもなほ、かやうにてなむ。何事も聞こえさせ寄るべき」と述べる場面である。両者とも文末を「よるべき」とする点で一致するが、他本では「よかるべき」とするものが多い。ほかにも、図B「思ひ給へらるる」（他本の多くは「思ふ給へらるる」）、図C「聞え給そ」（他本の多くは「聞えさせ給そ」といった類例が散見する。このように両者は書写者が異なっているものの、本文は近い関係にあるといえよう。（海野）

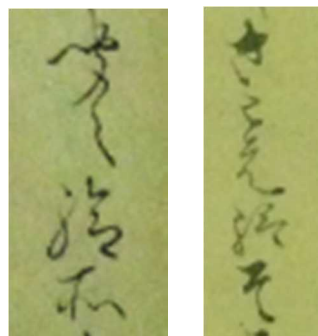
【図A】



【図B】



【図C】



※各図版、いずれも向かって左側が伝隆典の筆、右側が伝光忠の筆。

V 松会版と西鶴本

13 『大坂物語』 大本1巻1冊〔寛文8年[1668]〕刊（〔江戸、松会〕） *上巻存。

下巻を欠くので刊記の有無、字句は不明だが、諸本と比較して寛文8年の松会版と推定される。

『大坂物語』の整版本については、渡辺守邦氏が『大坂物語』の諸版（『実践女子大学文学部紀要』32、平成2年[1990]3月）で、寛永から享保にいたる刊記のある伝本と、無刊記の伝本とを合わせて18種に整理した。位田絵美氏は、「整版『大坂物語』の挿絵——寛永無刊記版と正保三年版を中心に——」以下の5編（『近世初期文芸』29～33、平成24年[2012]～平成28年[2016]）において、挿絵に注目して整版本の諸版に考察を加え、新たに、上巻末に刊記のある松会版（明暦2年[1656]刊、『東海近世』21（平成25年[2013]5月）表紙図版、柳沢昌紀氏の解説あり）を紹介した。入口敦志氏の「ホノルル美術館リチャード・レイン コレクションの意義——整版本『大坂物語』20点の比較からわかること——」（『国文研ニュース』48、平成29年[2017]）は、原本20点を同時に調査した報告である。

この鶴大本は、第103回貴重書展『和歌と物語』（平成16年[2004]）に展示された。渡辺氏が『大坂物語』の諸版に整理した中では、以下の通番号13・14・15・16のいずれかにあたる。

- ・13 寛文8年松会版、刊記「寛文八戊申年 松会開板」
大阪府立中之島図書館蔵（朝日文庫／255・2／1）（中之島本）
- ・14 13の刊記から「寛文八戊申年」を削った松会版
国立公文書館蔵（旧内閣文庫171／42、WEB上に画像あり）
早稲田大学図書館蔵（雲英末雄旧蔵、文庫31／E1793、画像あり）
- ・15 14の求版、無刊記
西尾市岩瀬文庫蔵（121／58）
国文学研究資料館（ナ4／328、画像あり）
- ・16 15の求版、新たに刊記を加えた享保7年杉浦三郎兵衛版
国立公文書館蔵（旧内閣文庫171／41）
国立公文書館蔵（旧内閣文庫171／40（取り合わせ本）の下巻、画像あり）

渡辺氏により、14以後の版では、13の匡郭上下の横罫が、版心上下の部分のみ削られている点が指摘されていたため（例、国立公文書館蔵（旧内閣文庫171／42）【図A】）、そこに注意して、上記諸本と比較した。鶴大本は、中之島本と同じく版心上下の匡郭が削られておらず（【図B】、展示ケース内に赤矢印で示す）、小口を見れば他本との違いが明らかである。この2種類の伝本だけが、四ツ目ではなく五ツ目の袋綴である点も共通する。両者ともに点画の細部が鮮明で、刷りムラのない早印であり、14より以前に同じ版木を使った版がほかにないと仮定するならば、鶴大本は13の端本ということになる。

しかし、13に先行する版が東京都立中央図書館特別文庫室、加賀文庫（加1718）に所蔵される。挿絵に落書きがない点においても稀少である。刊記には「寛文八戊申年五月吉日 松会開板」とあり（【図C】）、中之島本は、この「五月吉日」が削られて余白が生じたものとわかる。さらに、加賀本刊記の「五」字は入木のようなことから（「年」から「五」の筆脈が切れ、「五」字の中心が右にずれ、用筆も硬く、「五」と「月」の字間が広い）、何らかの字句が「五」と修正されたか、あるいは4月までに先行版が出ていたのが推察される。ただし、同文で書風の似た刊記が『新板つれづれ草』（例、早稲田大学図書館蔵、文庫31／E1785、画像あり）にもあり、「五」字は同様だから、版下筆者の書き癖とも考えられる。これらに比べ、『身のかがみ』（同、文庫31／E1784、画像あり）の刊記「寛文八戊申年正月吉日 松会開板」は筆脈が通っている。（また、同年刊の別版『大坂物語』として、「寛文八年申ノ六月吉日」の本通油町問屋板が知られているが、こちらの刊記の字配りも自然ではない。）未知の版種の出現を待ちつつ、調査・検討する余地が残されている。

加賀本（加 1718）の現状は、藍色無地原表紙の表皮と、損傷した原題簽とを生かして補修した上に、覆表紙を加えた四ツ目綴の改装本である。成立時に五ツ目綴であったかどうかは、きつく綴じられていて断定しがたい。

【図C】見開き左端

早くに刷られた加賀本が、刊記以外で中之島本・鶴大本と異なる点を例示する。

- ・中之島本・鶴大本で黒々と刷られている、題簽の匡郭がかすれている。
- ・中之島本・鶴大本では不鮮明な部分が、鮮明である。
上冊 4 ウ、5 行目 1 字目「連」字と上接する匡郭
上冊 11 ウ、6 行目下端「有堀しげ」と下接する匡郭
上冊 14 オ、5・6 行目上部

また、中之島本については、上冊 21 丁の内、1～15 丁あたりの紙面下部に、小さな虫損、破損を裏打ちによって補修した上で、本来あったはずの文字や挿絵の一部分を補筆した痕跡が散見される。同じ版木による本を横に置いて補写したかのようだが、中には、字母の異なる変体仮名で書いたところも混じる。以下の相違は中之島本の書き入れであって、入木の痕跡ではないので注意したい。

- ・上冊 11 オ 9 行末、中之島本「ふ」、加賀本・鶴大本「婦」
- ・上冊 11 ウ 6 行末、中之島本「有不り志げ」、加賀本・鶴大本「有堀志げ」
- ・上冊 13 オ 9 行末、中之島本「され共」、加賀本・鶴大本「佐連共」

『国書総目録』では、「刊年不明」とする中に「日比谷加賀」の 1 点が載る。加賀

文庫には『大坂物語』が 2 種類あり、（加 1717）は渡辺氏の 8（河内屋茂兵衛版）、（加 1718）は上記の寛文 8 年松会版、そのほか「日比谷諸家」（特別買上文庫（特 411）、蜂屋茂橋旧蔵）に 1 点あり、石塚豊芥子旧蔵、渡辺氏の 10（寛文 11 年安田十兵衛版）にあたる。他機関が所蔵する「刊年不明」本の中にも、版種の推定を試みるべき伝本が紛れてはいないのか。（松本）

【図A】国立公文書館所蔵『大坂物語』の版心（旧内閣文庫 171-42、上巻 6 ウ、見開き右端）

【図B】鶴見大学図書館所蔵『大坂物語』の版心（第 6 丁）

【図C】東京都立中央図書館特別文庫室所蔵『大坂物語』の刊記（加賀文庫、加 1718、部分）

※東京都立中央図書館特別文庫室所蔵資料の写真是、所蔵者に無断で複製・転載することはできません。

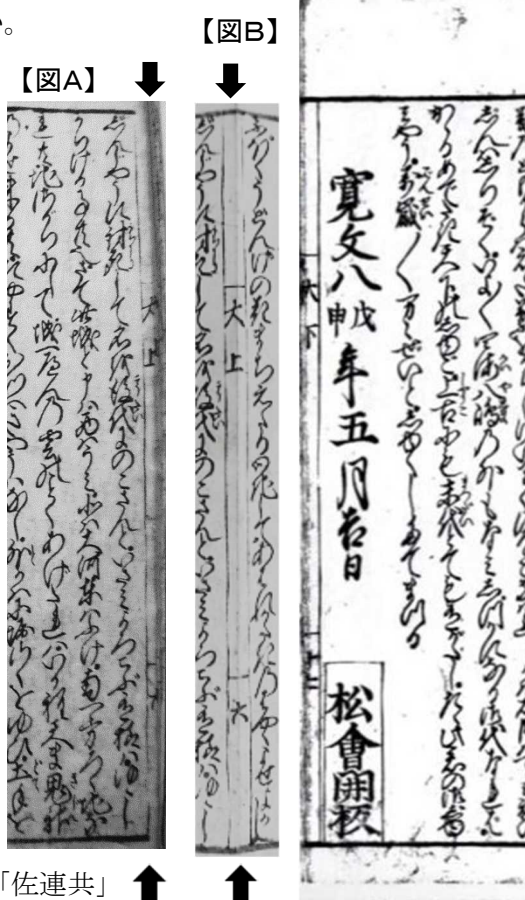
[参考 6] 『塵劫記』吉田光由原著 大本 3 卷合 1 冊 万治 2 年 [1659] 刊（江戸、松会）

松会は近世前期の江戸を代表する書肆。『大坂物語』よりも 10 年ほど早く出たこの本は、絵も文字も質朴な趣がある。よく使い込まれて掌上になじみ、くたびれた感じで伝わっている。

外題、後補表紙に打付書「明治十有七年四月／新板塵劫記 序／林利七／所有」。丁数、上 28 丁半、中 26 丁、下 17 丁半、計 72 丁。版心「塵劫キ 上（中・下）」。「目録題「新編塵劫記 一（～三）（第一冊の「記」は不全字、「紀」とも見える）」」。刊記、上巻末「万治二年松会開板」、中巻末「（訓点略）此新編塵劫記吉田光由開板鏤梓以寿其伝自今以後行千世為算法指南者如合符節後生勉勿輕忽」。

「塵劫記」と総称される本の内、万治 2 年 [1659] 松会版の完本。同版はわずかに下記が知られている。

- ・東北大学附属図書館和算関係文庫（3622、藤原松三郎旧蔵、WEB 上に画像あり）、上中合 1 冊
- ・早稲田大学図書館雲英文庫（文庫 31 / E 1780、画像あり、『松会版書目』収載）、上 1 冊



洛西嵯峨において医業と土倉（幕府公認の金貸し）で知られた角倉家は、本姓吉田。『塵劫記』著者の吉田光由（慶長3年[1598]～寛文12年[1672]）は、角倉了以の父、宗桂の弟、六左衛門の曾孫にあたる。算学に志して毛利重能の塾に通い、後に角倉了以の男、素庵にも学んだ。



【図版】『塵劫記』（万治2年、松会版）三より

『塵劫記』は寛永4年[1627]初版。生活、生業に関わる算

術を多く取り上げ、世に迎えられて改訂を重ねた。本人の著作として最後の版は寛永18年[1641]刊。生前より異版が出され、この松会版も一例である。影響を受けた算学書の板行は近代まで連綿と続いた。鶴見大学図書館は、寛永18年[1641]、安田十兵衛開板の『新編塵劫記』（中下合1冊）他を所蔵する。

【参考文献】『塵劫記』（吉田光由著、大矢真一校注、昭和52年[1977]、岩波文庫）、『江戸のミリオンセラ—『塵劫記』の魅力—吉田光由の発想』（佐藤健一著、平成12年[2000]、研成社）他。（松本）

14 『世間胸算用／大晦日八一日千金』井原西鶴著 大本2巻2冊

元禄5年[1692]刊（京、上村平左衛門／江戸、万屋清兵衛／大坂、伊丹屋太郎右衛門）*巻1・2存。

浮世草子『世間胸算用』（5巻5冊）は、井原西鶴（寛永19年[1642]～元禄6年[1693]）畢生の著作であり、初版である三都版は「元禄五壬申年初陽吉日」刊。後年、大坂で「元禄十二己卯年八月吉旦」の求版本が刷られたのは、元禄6年8月10日に52歳で他界した西鶴の七回忌にあたる。

鶴見大学図書館は、端本1冊（巻4）を所蔵していた。加えて、端本3種6冊（青裳堂書店古書目録『西鶴零残本』（平成丙申仲冬[2016]）所載）を購求した。この内、元禄5年版2巻2冊を展示する。早印。虫損少しあり。旧蔵者墨書「小野定右衛門」（巻末遊紙）。旧蔵印「三成」（巻首右下、円形朱印、白文）は、国文学研究資料館寄託「松野陽一氏蔵書」の『最明寺百首詠抄』（54-34、表紙右下に貼紙「三成蔵書」、WEB上に画像あり）と印影同じ。

凋落にいたる成りゆきをうすうす予感しながらも、たがが外れたように女郎狂いが止まらぬ男。よくよくおもしろければこそなれ、と西鶴は書く。亡父の遺産を手にして4年目の大晦日の闇夜、身過ぎのために山椒、胡椒の粉を売り歩く内に、気づけば、あかず通った丹波口に来ていた。——巻2の「三尤 始末の異見」末尾を開く。（松本）

15 『西鶴名残の友』井原西鶴著、北条団水序 大本2巻合1冊 元禄12年[1699]刊（浪花書林）

*巻4・5存。永田有翠、岡田真旧蔵、森銃三帙題簽。

巻4「五 何ともしれぬ京の杉重」後半を開く。

刊記に「元禄十二己卯歳首夏吉辰 浪花書林開板」とあり、西鶴七回忌の4ヶ月前に板行された最後の遺稿集。古今諸国の俳人を話材とする27編を収める。この鶴大本は、『弘文荘待賣古書目』29（昭和32年[1957]）に載った本であろう（巻4に落丁があることと、帙内面に鉛筆書きされる値付が一致）。帙題簽に落款（署名、押印）はないが森銃三の筆跡。丁数、巻4は11丁（他本12丁）、巻5は10丁、計21丁。版心、巻4「友四 一（～四、五ノ九、十、〔十一落丁、〕十二～十六終）」、巻5「友五 一（～三、四ノ十五、十六～二十一終）」。

『西鶴名残の友』の伝本は少ないが、以下のように、そのほとんどが影印本によって知られている。

- A『古典文庫』129、西鶴本複製20(吉田幸一編、昭和33年[1968])
 B『影印本西鶴名残の友』(吉田幸一編、昭和46年[1971])
 C『岩崎文庫貴重本叢刊』近世編3、浮世草子I(東洋文庫・日本古典文学会編、昭和49年[1974]) *底本、東洋文庫蔵(岩崎文庫)。339頁の図版は裏返し。
 D『近世文学資料類従』西鶴編19(金井寅之助解題、昭和55年[1980]) *底本、ケンブリッジ大学蔵。
 E『西鶴選集 西鶴名残の友(影印)』(楠元六男・大木京子編、平成19年[2007]) *底本、天理大学附属天理図書館蔵。『果園文庫蔵書目録』(昭和12年[1937]、故小田久太郎蔵)所載『西鶴名残の友』の旧蔵印「中しまとうふや」は天理本と同じ。このほか、正宗文庫本(上記Dに金井が報告)については未詳。上記A・Bの底本について、不明な点を述べる。

【図版】B表紙写真の略図(ペン書き)



楠元・大木両氏によるEの「解題」にある通り(137頁)、影印本A・Bは完本の複製ではなく、巻1・2部分にのみ、Cの東洋文庫本の写真を使っている。巻1の見開き中央上部の匡郭にかかる虫損、オ面6・7行目、6字目あたりの虫損が、東洋文庫所蔵の原本と、影印本A・B・Cとでみな同じである。他にも顕著な共通点として、原本巻2、2ウ・3オの見開きの挿絵に旧蔵者による彩色があり、2ウ上部左端に座す男の衣服が淡い一色であるのに対し、影印本ではすべて、上半身・下半身に濃淡がある。巻2、12ウ・13オの挿絵では、胡粉を用いた彩色の痕跡が、モノクロ印刷の影印本3種類にも表れている。写真に修正が加えられて、影印本の印象に差が生じているとしても、底本は同じく東洋文庫本である。

吉田幸一、古典文庫旧蔵本は、『国書総目録』(昭和40年[1965]初版)に「吉田幸一(巻一・二欠)」とあり、現在の所蔵機関の目録、『東洋大学図書館所蔵 古典文庫旧蔵書目録』(平成11年[1999]3月31日現在)の「解題」にも「巻三、巻四・巻五の2冊」とあって、完本ではない。ところが、

- ・『定本西鶴全集』9、「西鶴名残の友」(昭和26年[1951])の口絵には、吉田蔵書として写真2点(巻4・5表紙、巻1本文冒頭「一 美女に摺小木」半丁)が載る。巻1の上部・下部がかすれている。
- ・Aに添付の『会報』(昭和33年[1968]、紙片1枚、12.4×17.8㎝、鶴見大学図書館蔵)に吉田は、「『名残の友』の完本は天下一品でありますから、この複製本も有意義と思ひますし…」とする。底本が記されないが、ここに書かれる完本とは、当時の吉田本ではなくて東洋文庫本のことなのか。
- ・Bの「解説」(昭和46年[1971])には、「本書の底本は、五巻四冊、淡縹色表紙、書型は二五・五×一七・四cm。巻一の題籤は後補の書外題。(中略)巻一の本文第一丁表は、一七・六×一四・〇cm。」と書誌が記され(132頁)、後補の書題籤「絵入西鶴名残の友 一」が貼られた表紙写真が載る(【図版】に損傷の位置・形を示した)。東洋文庫の完本の題籤は「絵入西鶴名残の友 全 一ヨリ五迄」である。諸本の書誌が報告されている中に、「淡縹色表紙」の完本は知られていない。
- ・A・Bの巻1巻首、団水序文の半丁を見る限りにおいては、東洋文庫本とは別本の図版である可能性を完全には否定しがたい。最上部に大きなかすれがあり、Cや原本とは違う印象も受ける。

『西鶴』(天理大学附属天理図書館編、昭和40年[1965])には、吉田本、巻4・5の表紙が載り、「解説」に「合二冊 改装淡縹色替表紙」とあって(155頁)、この色は、Bの「解説」にある完本と同じである。これらがかつては5巻4冊一揃いであったのか、表紙が同色の完本が別にあったのか、巻1・2が出現しない限りわからない。(松本)

VI 初期草双紙と黄表紙・洒落本

16『五百八十七曲』中本2巻2冊〔江戸中期〕刊(江戸、鱗形屋) *赤本。

各冊絵題簽存。外題「五百八十七曲」(鶴屋商標)。柱題「五百八十 巻(〜十)」。朱印記「をばま」。

「草双紙」とは、江戸時代に出版された、挿絵入りの小冊子を指す用語である。毎丁に挿絵を配し、余白を平仮名書きの本文で埋めるのが特徴で、江戸時代の様々な文芸の中でも、特に挿絵の比重が高い。画文併存の形態は、時に現代の漫画に比せられることもある。絵と文章、いずれが主役というよりも、両者が互いに響き合い、重なり合って一つの世界を作り上げていく点が、草双紙の魅力である。

草双紙の形態は、刊行地域によっても相違しており、大きく分けて江戸版と上方版の2種がある。江戸版の草双紙は、表紙の色を基準に「赤本」「黒本」「青本」「黄表紙」に分類されるが、こうした表紙の意匠の推移は、内容の変遷にもほぼ対応している。大きさは、「中本」書型(縦18cm、横12cm程)を原則とするが、近世の書籍の規格としては、これはあまり格式の高くない、実用書や通俗的な娯楽の本に用いられるサイズであった。多くは表紙に絵題簽(後には錦絵風の摺付表紙)を配し、丁数(本文の紙数)は5丁を一冊とするのが定型である。

草双紙のうち、初期の「赤本」は概して現存点数が少なく、遺存例は貴重。この『五百八十七曲』も、他に東洋文庫および京都大学附属図書館所蔵本が知られるのみである。『近世子どもの絵本集 江戸篇』(岩波書店、1985年)に東洋文庫本の影印・翻刻があり、木村八重子氏の解説が備わる。

書名は、五百八十年と七廻り(一廻りは干支〔十干十二支〕が一周する60年、その7倍で420年)、即ち千年の長寿を祝う意。謎解き風の書名という意味でも興味のある作と言えよう。

内容としては、中国・前漢の東方朔が、西王母の仙桃を盗み食いで

長寿を得たという故事に基づく。東方朔から長寿を授かった正徳長者は、不老不死の薬を一門に与えて、皆並外れた長寿を保つ。正徳長者の580歳の賀には、350歳の惣領息子を筆頭に、7人の息子と嫁が揃って長寿を祝う(出陳部分)。この後、惣領が不心得のため勘当され、二郎と三郎が相談の末に、四郎の秘蔵の孫に詫言させて帰参が叶う。四郎方での祝宴で、孫ひこ玄孫が長者の手足を揉んだところが、580年の皺が一度に延び、身の丈二丈にもなって困惑するが、氏神と東方朔に祈念して無事回復、いよいよ寿命長久となる。最後には、長寿を祝って餅を搗く場面が描かれ、「五百八十の餅」の由来譚として語りおさめる。

突飛な設定のようではあるが、波乱に富んだ展開で魅力のある作。誇張と笑いの中に、長寿を祝い、子孫繁栄を寿ぐ作意が表現されている。殊更な長寿の強調は、祝祭性を本来とした赤本の特徴を反映したものと見えよう。草双紙は初春の刊行を通例とし、正月の贈答品(お年玉)として用いられる祝儀物でもあった。「赤」が魔除けの色、祝祭的な色でもあることは、草双紙の本質と関わって重要である。

本作は桜川慈悲成著・歌川国貞画の合巻『赤本/伝来』五百八十七曲』(文化9年[1812]、鶴屋金助刊)にも翻案紹介されており、愛すべき荒唐無稽さと祝儀性が、後代にも好まれたことが窺える。

なお、各冊巻頭・巻末の印記から、大正・昭和期の時事評論家・蔵書家であった小汀利得の旧蔵書であることが知られる。また、上冊見返しには「此ぬしうば」の墨筆書入が見られる(図A)。書入の年時は不明であるが、たとえば川柳にいう「くさぞうしおうばつぶさに申上」(『柳多留』第10編)などのように、乳母(姥)が子どもに読み聞かせ、絵解きをして聞かせた情景などが想像されようか。(神林)



図A 見返し書入れ

17『和漢鼠合戦』〔長谷川光信〕画 半紙本1巻1冊〔宝暦・明和頃〕刊（無刊記）*上方版草双紙。

紺色無地表面紙。題簽、左肩子持枠「和漢鼠合戦 全」。丁付（ノド）「一（～六）」。

本文5丁半。書名の通り、本作は日本の鼠が唐土に攻め寄せ、彼の地の鼠と一戦を構える様を描いたもの。甲冑や尻尾の形の相違などで彼我の鼠を描き分けるが、実際の合戦の描写については、平敦盛討取りなど、源平合戦を下敷きとしている。錨を振りかざした平忠度を描いた画中の台詞として、「海老蔵」の名を出している点からは、『平家物語』について、歌舞伎を介して親しんでいた享受者層が想像されよう。

本作は、『近世子どもの絵本集 上方篇』（岩波書店、1985年）に影印・翻刻が収載されている。同書の解題では、底本を含めて2点の所在を記すのみ（鶴見大学本は含まず）、『国書総目録』（日本古典籍総合目録）にも本書は立項されておらず、稀覯本の一に属す。

上方版の草双紙は、残存点数がきわめて少ない事情もあり、装訂・内容ともに詳細はなお不明な点が多い。書目の収集・整理を含めて、今後の研究の進展が俟たれる。書誌的特徴についても、体系的な定義は今後の課題ではあるが、以下、前掲『近世子どもの絵本集』の解題によって、その概要を述べる。上方版の草双紙は、初期には極小本や中本の書型も行われたが、江戸中期以後は半紙本型が主流となり、原則として1冊本（例外的に2冊物・3冊物も）で版行されている。紙数は6、7丁のものが多く、短いものは4丁、長いものは12、3丁に及ぶなど、明確な基準は見られない。題簽は、左肩子持枠の短冊簽がほとんどであり、なおかつ漢字にふりがなを付すのが通例である。総じて、江戸版の草双紙（中本書型、5丁1冊を定型として絵題簽を備える）に対して、装訂面では独自の行き方を示している。

なお、本作の作者・絵師の署名は見出せないが、『近世子どもの絵本集』解題では、挿絵の画風から、宝暦明和期に草双紙の挿絵や絵本類を手がけた長谷川光信画と比定している。（神林）

18『扱茂其後白髪公時』柳川桂子作、鳥居清経画 中本2巻2冊 安永6年[1777]刊（江戸、鶴屋喜右衛門）

黒色無地表面紙。上冊絵題簽「酉（しん／はん）扱茂其後白髪公時 上」（鶴屋商標）。下冊題簽欠。

柱題「しらか金時」。丁付「一（～十了）」。「桂子作／清経画」（10ウ）。全10丁。

源頼光四天王の一人とされる坂田金時の「後日」譚に、御家騒動の筋を絡めた作。大江山の入り口、源頼光の鬼神退治の故地に、突如現れた大穴から芳しき煙が上がる奇事あり。源頼信の命をうけ、検分に出向いた平井昌俊の前に、「過ぎし万寿の頃姿を隠せし坂田金時」が出現。仙術を修めた金時は、昌俊の家臣による謀叛の計画を見抜き、昌俊一行に酒を勧める風を装って、悪臣に毒酒を飲ませる。昌俊配下の忠義の武士の活躍もあって謀反は露頭、悪臣は切腹してめでたき春の栄えとなる。

頼光四天王の一人である坂田金時が、「白髪」の老体として現れるのみならず、仙術を修めて悪臣の企てを未然に防ぎ、鶴に乗って飛行するなど、仙人の如く描かれるのが構想の軸をなす。平井昌俊の妻として登場する小式部内侍が、夫の帰りが遅いのを案じて「大江山いくのの道の遠ければ…」の歌を詠むなど、古歌の由来にこじつける条もある。随所に配された「むだ口」（たとえば、大穴から煙の上る奇瑞に「あな不審なことだ」と呟く男など）も笑いを誘う。

絵師の鳥居清経は、黒本・青本時代を代表する画工の一人。本書の作者「桂子」（柳川桂子）のほか、米山鼎峨などの作者と組んだ作例もある。

丹表紙を備えた「赤本」に続いて、江戸版の草双紙の主流となるのが、黒色表面紙の「黒本」と、これと並行して行われた「青本」である。なお、青色表面紙はほどなく褪色して萌黄色（黄色）になったため、続いて現れる「黄表紙」と、外形的には変わらない（現に、同時代の用例では、黄表紙を指して「青本」と表記している例も多い）。赤本時代の草双紙は、昔話を中心とした、「子ども向け」を建前とするものが中心であったが、黒本・青本は演劇や軍記を取り入れ、ストーリー性を増していくことになる。

なお、今日の文学史の用語としては、安永4年[1775]刊行の『金々先生栄花夢』（恋川春町作画）を嚆矢として、以後の草双紙を「黄表紙」と呼んでいる。『金々先生栄花夢』は、「子ども向け」を建前とす

る草双紙の形を借りながら、当世風俗や古典のパロディなどを随所に盛り込み、機知と諧謔に富んだ「大人」の文芸に一新してみせた。いわば、草双紙自体をパロディ化してみせたのが『金々先生栄花夢』であり、以後この作風に則って、機知と諧謔を旨とした草双紙が次々と刊行されていくことになる。

ただし、形態（表紙の色）を以てジャンルの呼称とする分類法には、いささかの留保が必要である。たとえば、松原哲子氏は、青本・黄表紙が後刷りの際に黒本体裁に改められたことを指摘し、黒本・青本・黄表紙が同時並行的に作成・享受されていたことを示唆する。草双紙の変遷をめぐる従来の文学史は、版本の実証的な検証に基づいて、新たに書き直されるべき時期を迎えていると言えよう。

安永6年[1777]に刊行された本作のジャンル区分も、上記の点と関わって若干の問題を含んでいる。『国書総目録』では「青本 黒本」として立項されるが、鶴見大学本は黒色表紙を備えており、東北大学狩野文庫本・中央大学図書館所蔵本も「黒本」体裁である。原装が「青本」であった可能性もあるが、原装の考証を含めて、本作の分類については、なお検討の要がある。（神林）

【参考文献】松原哲子「鱗形屋絵外題考」（『近世文芸』87号、2008.1）、同〔口頭発表〕「草双紙試論－呼称・内容と時代との関係について」（「絵入本ワークショップXI」於ソウル・明知大学、2018.12.16）。

19『蜀魂三津啼』^{ほととぎすみつのさえずり} 雀千声^{じゃくせんせい}作、〔勝川春旭^{かつかわしゅんきょく}〕画 中本2巻合1冊 天明2年[1782]刊（版元不明）

* 初代坂東三津五郎追善草双紙。巻末一丁欠。

草双紙の特質の一つとして、流行の題材を逸早く取り入れる速報性^{きわもの}、際物性を指摘することができる。「際物^{きわもの}」とは、時事に取材して、即時に作って売り抜けるものを指す語であるが、黄表紙にもこの特質は継承されている。本作のような、人気役者の追善として刊行された作品もその一例と言えよう。

天明2年[1782]4月10日、初代坂東三津五郎が没した。三津五郎はもと大坂の役者であったが、江戸役者の坂東三八が大坂興行の折にその才を見出し、ともに江戸に下った。容姿、芸ともにすぐれて人気を得たが、38歳の若さで興行中に急逝。その死を悼み、追善として刊行されたのが本作である。

天明2年の春興行では、三津五郎は^{おおつえ}大津絵の所作をつとめて好評を得たが、四月興行の初日を終えて楽屋に戻ると「夢ともなく現ともなく」^{うつつ}大津絵の鬼が現れ、三津五郎を地獄に案内する。地獄では、平賀源内（安永8年[1780]没）ならぬ「べん内」が三途の川原に「六ツ又新地」を作らせて繁昌。市川八百蔵（中車菩薩）は、三津五郎や三代目瀬川菊之丞（路考菩薩）など、地獄に来合わせている役者を集めて歌舞伎興行を発案、『菅原伝授手習鑑』などで大当たりをとる。初日の菊五郎・三津五郎による「お千代半兵衛」に続いて、三津五郎が^{どうじょうじ}道成寺の所作をかけ、羅漢たちの読経によって極楽往生を遂げる。

追善物の黄表紙の常道に則り、地獄での物故役者の芝居興行を中心とするが、細部に当世事情や役者の事績を取り込んでいる。春興行を踏まえて、大津絵風の鬼を登場させる冒頭に続き、三途の川原の「六ツ又新地」は、安永天明期に隅田川の中洲^{なかす}を埋め立てて作られた「三ツ又新地」のもじり。三津五郎・菊之丞の「お千代半兵衛」は、生前の二人が実際に演じた演目でもあった。

なお、表紙の絵題簽には「三津五郎正銘じせい并惣役者追善発句入」とあり、9丁裏に三津五郎の墓所を描いて、墓碑に辞世を記している。（図A）また、最終丁には五代目団十郎はじめ19人の役者による追善発句を載せる旨、『黄表紙総覧』等に指摘が備わるが、鶴見本は当該の第10丁を欠く（図A）。欠丁の時点は不詳ながら、追善発句のみを手許に置きたいという旧蔵者が存したとすれば、それ自体も興味深い。

追善黄表紙という際物性のためか、他本としては大阪大学図書館忍頂寺文庫本が知られるのみ。『新修年表』『書目年表』は本作を袋入とするが、『黄表紙総覧』では阪大本の表紙図版を掲げ、絵題簽を備えることから、袋入説に疑義を呈する。作者の「雀千声」については、



図A 9丁裏（鶴見本巻末）

『黄表紙総覧』では、天明4年刊の2点の黄表紙（『紅葉の雛形』・『（夫は楠／是は枅）太平記』）の作者「鶴一声雀千声」と同一人物と推定する。他の著作は知られず、伝未詳。画工については、『書目年表』等には「勝川春常」とあるが、本作9丁裏の署名から、『黄表紙総覧』では「勝川春旭」とする。（神林）
【参考文献】 棚橋正博編『黄表紙総覧』（日本書誌学大系48、青裳堂書店、1986-2004年）

20 『文武二道万石通』 朋誠堂喜三二作、喜多川行麿画 中本3巻3冊

天明8年[1788]刊（江戸、^{つたやじゆうざぶろう} 蔦屋重三郎）*寛政の改革物黄表紙。書入れあり。

各冊絵題簽存。柱刻「万石 一（～十五）」。^{てがらのおかもち} 作者の朋誠堂喜三二（狂歌名・手柄岡持）は、秋田藩の留守居役という重職を務める一方、狂歌や黄表紙に健筆を揮った。行麿は喜多川歌麿に師事した絵師。

いわゆる「寛政の改革」による文武奨励策を、黄表紙という媒体で、いち早くうがってみせたのが本作である。設定は鎌倉時代に借りているが、着衣の紋所などに、当時の大小名を細かく当て込んでいる。源頼朝（^{いえなり} 家斉）の命をうけた智臣・^{はたけやましげただ} 畠山重忠（定信）は、富士の人穴を使って「文」「武」の士と「ぬらくら武士」を弁別。大多数の「ぬらくら武士」に文武を修めさせるため、定信は計略をめぐらし、箱根七湯で遊興させた上で後始末を課して懲らしめ、最後はのらくら武士に訓戒を施して結局となる。

本作の主眼は、改革政治への「批判」というより、田沼時代の武士たちの趣味生活を揶揄したものと考えられるが、モデル穿鑿の興味とも相俟って、未曾有の話題作となった。版元の蔦屋重三郎は、幕府の譴責を憚って、衣服の紋等を削除・変更した再刻版、更に修訂を加えた第3版を出しているが、依然モデル穿鑿の関心が止まなかったことは、同時代の随筆などからも窺える。本学所蔵本は、着物の紋所等の考証から、上記の第3版と判断される。たとえば重忠の着衣は、再版では重忠の肩衣に定信の紋所である梅鉢紋が彫られていたのが、3版では削除されている。ただし、鶴見本の上巻1ウ2オ（出陳部分）には、重忠の着衣に後から墨筆で梅鉢紋を書き入れた跡がみられ、本作が依然モデル穿鑿への関心を主として享受されていたことを物語っている。（神林）

【参考文献】 中山右尚「『文武二道万石通』の書誌」（『共立女子短期大学紀要』20号、1977年3月）、水野稔「黄表紙における刊年と異版の問題」（水野稔『江戸小説論叢』中央公論社、1974年）

21 『古契三娼』 山東京伝作、山東けいこう画 小本1巻1冊

天明7年[1787]刊（江戸、^{つるやきえもん} 鶴屋喜右衛門）*初版。

22 『古契三娼』 山東京伝作、山東けいこう画 小本1巻1冊

天明7年[1787]刊・改修後印（江戸、^{つたやじゆうざぶろう} 蔦屋重三郎）*改修後印本。

ここで、洒落本の作例にも目を向けてみたい。洒落本とは、遊里を扱った小冊子で、草双紙（中本）よりも一回り小さい、^{こほん} 小本の形態で版行された。多くは唐本を模した地味な茶色表紙を備え、挿絵も1冊に1葉あるかない程度である。作者や画工、享受者層などの点でも、安永・天明期の黄表紙と重なる部分が多い。内容としては、遊里を舞台として、通客や通を気取った半可通、野暮など客の種々相を描くとともに、遊女たちとの応対を多く会話体で描く。言辞・構成ともに、当世風の表現や遊里の流行が取り入れられる一方で、中国の古典や故事に取材した、高踏的な作意が用いられることも多い。

洒落本『古契三娼』は、吉原・深川・品川の遊女上がりの3人の女性の会話を通して、江戸を代表する3箇所の遊里の特色を描き出した作。書名は中国の故事「虎溪三笑」（儒・仏・道の三賢者が一堂に会して語り合った逸話）をもじったもので、こうした典拠の踏まえ方にも、中国の遊里文学をその範に仰いだ洒落本の行き方が見出される。

本学には、版元の異なる2種の版が所蔵される。初版は鶴屋喜右衛門版であったが、後に板木を譲り受けた蔦屋重三郎（蔦重）が、奥付を彫り変え、表紙を改めて刊行した。蔦重の後印本にも、奥付記載の相違によって2種が存在しているが、本学所蔵本はこのうちの第1種に分類される。（神林）

Ⅶ 江戸読本と半紙本型草双紙

23 『俊寛僧都嶋物語』^{しゅんかんそうずしまものがたり} 曲亭馬琴^{きょくていばきん}作、歌川豊広^{うたがわとよひろ}画 半紙本^{はんしほん} 8巻8冊 文化5年[1808]～同6年刊(江戸、柏屋半蔵^{かしわやはんぞう})

江戸時代の小説の中でも大きな位置づけを占めるのが、「読本」と呼ばれるジャンルである。多くは中国の白話小説^{はくわしやうせつ}や日本の古典に材を取り、史実や説話なども踏まえながら、複雑な構成のうちに伝奇的な物語を綴る。刊行された土地や成立年代により、装訂や作風に相違があるが、概して和漢の典拠を駆使し、構想・修辞ともに工夫を凝らした精緻な作意を特徴とする。中本を基本とする草双紙に対して、一回り大きい半紙本^{はんしほん}という書型で刊行されたことも、読本の「格」の高さを示すものである。

その特質上、読本は文章を主体としており、挿絵は概ね1冊に4～5葉程度である。ただし、挿絵について意が用いられていないわけではない。読本の挿絵は、作者が下図を描いて画工に指示するのが通例であり、人物の相貌や衣服など、絵組の細部に作品の微意や伏線が示されていることも少なくない。また、表紙や見返、口絵には、唐本の体裁をも取り入れた精緻な意匠が用いられ、造本の美術、更には彫摺の技巧という点でも注目すべきものがある。こうした装訂上の特色は、やがて草双紙^{こうかん}(合巻)にも取り入れられていくこととなる。

ここでは、19世紀に江戸の地で刊行された読本を二点出陳する。『俊寛僧都嶋物語』^{しゅんかんそうずしまものがたり}は、『平家物語』等に登場する俊寛僧都^{しゅんかん}を主人公として、これを浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』^{きいちほうがんさんりやくのみまき}の鬼一法眼に附会したもの。鬼一法眼は、軍記『義経記』に登場する伝説的な陰陽師・兵法家であるが、平清盛に謀叛を企てて島流しにあった俊寛の事績をこれに重ね合わせ、硫黄が島から脱出した俊寛が、軍学者鬼一法眼として暗躍、南都法華寺に隠棲して大往生を遂げたとする。更に俊寛の妻・松の前や、娘の鶴の前などを登場させ、松の前への清盛の恋慕、平家打倒を志す若者・牛若と鶴の前の悲恋、俊寛の子徳寿丸とこれを守護する忠臣^{あつお}・蟻王の艱難など、波乱に富んだドラマを描き出す。

曲亭馬琴は、江戸後期の長編読本を数多く手がけた、代表的な作者の一人。和漢の書を博搜して史実や説話等を広く取り入れ、勧善懲悪を重視した壮大な構想の作で知られる。本作は、史上不遇の人物を新たな解釈のもとで描き出す史伝物^{してんもの}の一作で、俊寛を正義の士とみる作者の主張が盛り込まれている。画工^{うたがわとよひろ}の歌川豊広は、風景画に長じ、馬琴読本の挿絵としては、葛飾北斎^{かつしかほくさい}に次いで多数の作がある。

本作は、初版の柏屋半蔵版のほか、後刷りの江戸・堺屋国蔵版、更に大坂の河内屋真七による求版(10冊本)がある。本学所蔵本は、上編(1～4巻)は初版、下編(5～8巻)は堺屋版の取り合わせ本。江戸期の版本の常として、版元の変転に伴い、次第に摺刷^{しゅうさつ}の手数が省かれていく。初版の指標として、鈴木重三氏は、巻之一(18ウ19オ)の月夜の景の薄墨、巻之四(9ウ10オ)の安良子が賊に害せられる場面の薄墨と空に入れた一文字ボカシなど、複数の場面を指摘している(掲出部分)。(神林)

【参考文献】鈴木重三「馬琴読本諸版書誌ノート」(『絵本と浮世絵』美術出版社、1979年)

24 『鬼児島名譽仇討』^{おにこじまめいよのあだうち} 式亭三馬^{しきていさんば}作、歌川国貞^{うたがわくにさだ}画 半紙本^{はんしほん} 8巻8冊

文化5年[1808]刊(江戸、西宮新六^{にしのみやしんろく}) *半紙本型草双紙。見返しに「上紙摺の合巻」の表記あり。

19世紀に入ると、草双紙の数冊分をまとめて1冊に綴じる「合巻」の体裁が一般化する。黄表紙は上下2巻ないし上中下3巻が通例であったが、「合巻」は複数冊をまとめて編を嗣ぎ、次第に長編化する。相応じて内容にも変化がみられ、敵討^{かたきうち}や諸国の名所、古典の翻案など様々な要素を取り込んでいく。

『鬼児島名譽仇討』は、「合巻」の早期の例である。本作(中本書型)の見返しには、「草さうし合巻」の表記があり、これは振り仮名のよみを付した「合巻」の用例として最初のもの。複数冊を合冊するという新機軸は、当初は製本の手間を省くため、廉価版に対して行われたが、以後この手法が定着し、表紙に浮世絵風の美しい多色摺り表紙(摺付表紙^{すりつけびょうし})をつけて売られるのが通例となった。

なお、合巻は基本的に中本の書型で刊行されるが、初版の時点で半紙本書型の特製本をあわせて刊行する場合があった。この場合は良質の料紙を用いたことから「上紙摺」とも呼ばれる。本学所蔵本は上紙摺の早い例で、見返しに「上紙摺の合巻」と明記される点でも貴重な遺例である。

作品の内容としては、大名家の御家騒動を背景に、悪臣による忠臣の惨殺と、その妻女らによる敵討を主軸とする。ここに「日下開山」の力士・鬼児島角五郎を配し、力自慢の角五郎が天狗の太郎坊との力競べに負けて改心、以後太郎坊とともに敵討に力を添えて、見事本懐を遂げさせるまでを描く。書名角書に「天狗利生」とあるように、愛宕天狗の太郎坊を随所に出没させ、独特の怪奇趣味を漂わせるのも特色である。また、たとえば太郎坊による鬼児島訓戒の場面（出陳図）では、文字を天狗の羽風として表現し、匡郭（版面の外枠）も風景と一体化させるなど、画面構成の点でも創意がみられる。（神林）

【参考文献】佐藤悟「草双紙の造本形態と価格」（『近世文芸』56号、1992年7月）、同〔口頭発表〕「草双紙の世界—ソウル大学所蔵本を中心に」（「絵入本ワークショップ」於ソウル・明知大学、2018.12.15）。

25『緞手摺昔木偶』柳亭種彦作、柳川重信画 半紙本5巻5冊

文化10年[1813]刊（江戸、山崎屋平八）

読本の二点目として、柳亭種彦の読本を紹介する。書名の「緞手摺」は、近世前期の浄瑠璃用語で、人形遣いの姿を透かして見せるために緞布を張った手摺を指す。書名に示される通り、元禄期を中心とする近世前期の演劇や語彙の考証に熱意を注ぎ、多数の考証随筆をも残した種彦ならではの作である。

内容としては、近松門左衛門作の浄瑠璃『淀鯉出世瀧徳』に大枠を借りつつ、そこに独自の要素を加えて、数奇な因縁に彩られた物語を展開する。戦乱で親を失い、許嫁と知らぬまめめぐり逢って恋に落ちる吉三・千鳥を軸に、それぞれに忠義を尽くす忠臣夫婦を2組登場させ、武家の義理と忠節、復讐の悲願と艱難、怪異と予言、誤解による懊悩など、様々な因縁を絡めて複雑な筋を織りなしている。

先掲の近松浄瑠璃のほか、他の近松作や西鶴の浮世草子、あるいは元禄期の小唄（『松の緑』所収）などを人名や展開のうちに縦横に取り入れ、緻密な考証が全編を貫いている。考証に裏づけられた巧緻な作意は造本面にも及び、たとえば表紙には古画を模倣した絵題簽を配する。口絵や挿絵にも、薄墨などの技法を効果的に駆使して、古画や絵巻、地獄絵図などの画証資料が巧みに生かされている。

馬琴も『をこのすさみ』の中で本作に言及し、数年前の読本に比べて長足の進歩を見出している。ただし、本作を最後に、以後種彦は読本の筆を取らず、合巻の著作に専心する。本作の演劇色や挿絵への配慮が、種彦に自らの資質を意識させたものとするれば、その意味で転機を画す作と言えよう。（神林）

【参考文献】（Ⅵ～Ⅷ共通：主要なもの。解題中に挙げたものは原則として除く）

【事典・年表】・『草双紙事典』（叢の会編、東京堂出版、2006年）

・『赤本黒本青本書誌 赤本以前の部』（木村八重子編、日本書誌学大系 95、青裳堂書店、2009年）

【全集】・『洒落本大成』（中央公論社、1978-88年）

・『山東京伝全集』（ペリかん社、1992年-〈刊行中〉）

【作品影印・注釈】・『倭紫田舎源氏』（鈴木重三校注、新 日本古典文学大系 88・89 岩波書店、1995年）

・『白縫譚』（高田衛監修、佐藤至子編・校訂、国書刊行会、2006年）

【草双紙研究文献】・木村八重子『草双紙の世界——江戸の出版文化』（ペリかん社、2009年）

・佐藤悟「草双紙とは何か」（『山東京山伝奇小説集』月報4、国書刊行会、2003年1月）

・佐藤至子『江戸の絵入小説——合巻の世界』（ペリかん社、2001年）

・鈴木重三『絵本と浮世絵』（美術出版社、1979年）

・鈴木俊幸『江戸の本づくし——黄表紙で読む江戸出版事情』（平凡社新書 566、2011年）

・鈴木俊幸「書籍の宇宙」・「草双紙論」（鈴木俊幸編『書籍の宇宙』平凡社、2015年）

VIII 長編合巻の造本美

26 『^{にせむらさきいなかげんじ}修紫田舎源氏』^{りゅうていたねひこ}柳亭種彦作、^{くにさだ}歌川国貞画 中本 38 編合 19 冊 文政 12 年 [1815] ~ 天保 13 年 [1842] 刊 (江戸、^{つるやきえもん}鶴屋喜右衛門)

^{すりつけひょうし}摺付表紙。鶴見大学本は 2 編ごとに合綴し、保護表紙を付す。保存箱あり。

『源氏物語』を当世(「今様源氏」)に翻案したもので、光源氏をモデルとする美貌の貴公子・^{あしかがみつうじ}足利光氏の活躍を描く。御家騒動を背景とした推理小説のような構成で、謎解きの妙味も楽しめる。原典の緻密な考証に基づいた翻案は、考証家としても知られる種彦の技量を示すものであろう。挿絵の効果を十分に生かした画面構成に、ジャンルの特質が遺憾なく発揮され、草双紙の一つの到達点を示している。

^{きんすなご}金砂子を散らした摺付表紙など、装訂の華麗さも本作の魅力の一つであるが、折からの天保の改革で、美しい造本が統制の槍玉に上げられ、絶板処分を受けている。作者種彦の体調の悪化もあり、38 編を最後に本作の刊行は途絶、間もなく種彦は世を去った。

なお、初編の板木は文政 13 年正月 19 日の火災で焼失しており、同年 2 月の再刻本が世上多く流布している。再刻本は序年記を「文政十二年己丑正月発販／同十三年庚寅二月再板」とするなどの相違があるが、鶴見本は初版本。以下取り合わせ本で、編によりやや後印本もあるが、概ね彫摺は良好である。

本作に取材した浮世絵も数多く出版され、「源氏絵」と総称される。作中場面に基づいた図様のほか、^{みつうじ}光氏を狂言廻しとして、各地の名所・^{うたまくら}歌枕や生活風俗などを描いたものも多い([参考 7・8])。(神林)

[参考 7] 『^{りゅうていおうちよしよもくろく}柳亭翁著書目録』^{りゅうていせんか}柳亭仙果著 特小本 1 巻 1 冊 天保 5 年 [1834] 写 (自筆)

* 後人補筆あり。小寺玉晁旧蔵 (朱長方印「このぬしせんくわ」、朱印「玉晁」)

袋綴 1 冊。縦 12.4、横 9.1 糎。題簽、左肩「柳亭翁著書目録 上」(墨書)。18 丁。

柳亭種彦の著作を、弟子の笠亭仙果が編年体でまとめた目録。序文にて師種彦の文業を讃え、多数の著述の検索のためにこの冊を編んだとする。文化 4 年 (1807) から天保 5 年までが成立当初のもので、以下天保 13 年 (種彦の没年) までは別筆と見られる書きつぎ、最終丁に種彦の戒名と辞世の句を記す。若干の遺漏もあるが、『^{おんなめがずら}女目鬘』、『^{しょうほんじたてりょうめんかがみ}正本製両面鏡』の一枚刷など、世上知られぬ作も著録されている。

27 『^{しらぬいものがたり}白縫譚』^{りゅうかていたねかず}柳下亭種員・^{りゅうていせんか}笠亭仙果・^{りゅうすいていたねきよ}流水亭種清作、 ^{くにさだ}歌川国貞・^{よしいく}二代歌川国貞・^{とよはらくにちか}歌川芳幾・^{とよはらくにちか}豊原国周・^{もりかわちかしげ}守川周重・^{ようしゅうちかのぶ}楊洲周延画 嘉永 2 年 [1849] ~ 明治 4 年 [1871] 刊 (^{ふじおかやけいじろう}藤岡屋慶次郎・^{りゅうかてい}柳下亭・^{ひろおかやこうすけ}広岡屋幸助・^{まるやてつじろう}丸屋鉄次郎) 中本 61 編 101 冊 * 袋付美本。

摺付表紙。14 編までは 4 冊分を合冊。15 編以下は、各編袋 (書袋) 入りで伝存。

合巻『白縫譚』は、幕末明治期にかけて、30 年以上にわたって書き継がれた大長編である。版本としては 71 編、活字翻刻のみ残るものを加えれば 90 編まで続いて完結、合巻としては最長編の作。

内容の点でも、本作はきわめてスケールの大きな伝奇ロマンである。舞台を戦国時代の九州に設定し、黒田家の御家騒動や天草の乱、その他各国の地誌や浮世草子など、様々な先行作品を取り込んでいる。大友宗隣の遺児として、御家再興と九州平定を誓う美貌の主人公若菜姫は、^{おおともそうりん}蜘蛛の妖術を自在に操り、時に男装して敵方に潜入するなど、変幻自在の活躍を示す。若菜姫の造型は、泉鏡花にも愛されて賞賛されるほか、江戸川乱歩も本作を愛蔵するなど、近代以降の怪奇・幻想文学にも水脈を通じている。

本学には、初編から 61 編までが所蔵される。61 編の刊行 (明治 4 年) 以後、62 編の刊行まで 7 年の空白があり、これを一つの画期とする意識が存していたか。15 編以降は、袋 (書袋) 入りでの伝存が注目される。袋は基本的に早印本にのみ付せられ、なおかつ購入後の開封を前提としているため、刊行当時の形態を留めた例は貴重。意匠の妙や精緻な彫摺、鮮やかな色彩も見所である。(神林)

Ⅹ 集うたのしみ／遊びの文芸

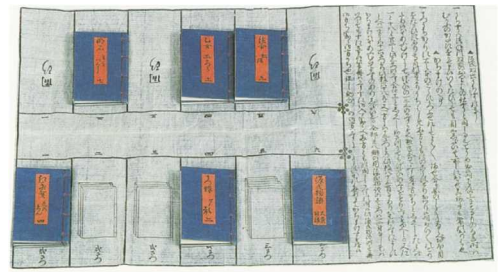
28 『源氏物語双六』 豆本 28 巻 28 冊・別紙 1 舗 [寛延 2 [1749] 年刊・江戸後期印] *元桐箱付。

『源氏物語』の豆本を駒のかわりに用いた盤双六である。

【図 A】

朱色刷題簽を中央に貼付した縹色布目地表紙の豆本 (7.0×4.9 糎) 28 冊に、遊び方の説明書「源氏双六うちやうの事／かちまけの事」(図 A) 1 舗 (26.1×42.6 糎) を付す。題簽には「源氏物語〈大意／目録〉」「桐つぼ はゝ木々 一」等と刷られる。

表紙や題簽は『源氏物語湖月抄』を模したものか。1 冊毎に『源氏物語』2 帖分の梗概と代表歌を収め、全冊 5 丁で仕立てられる。



よって、27 冊で 54 帖となり、それに大意目録を加えて 28 冊となっている。また、若松模様の小形桐箱に収められ、その蓋に貼付された刷題簽には「源氏物語全廿八巻」とある。豆本のみが残る場合は少なくないが、元箱と説明書を揃えた双六としての完本は極めて稀である。説明書によれば、遊び方は盤双六 (折り葉) と同様であるが、最後に題簽に記された巻数を合計して、その数が多い方を勝ちとする点が異なる (ただし、初心者は巻数ではなく冊数の合計で勝ち負けを決めても良いとする)。

なお、鶴大本は無刊記であるが、「寛延二巳年九月中旬／皇都 新町通三条上ル町／吉田善五郎」の刊記を有する伝本が早稲田大学図書館や国立国会図書館等に所蔵される (図 B)。早大本は鶴大本より凝った仕立てであり (図 C)、国会本は同装訂である (早大には 2 点あり、うち 1 点は鶴大本と同装訂)。いずれも鶴大本より刷りは良いものの別紙はない。興味深いのは、国会本の桐箱に貼られた刷り物であり、そこには「出来本／源氏物語 桐絵付箱入／同上々本 黒ぬり箱入／右之外御望次第如何様ニも仕立候。御用之節被仰付可被下候。／新町通三条上ル町／吉田善五郎」とある (図 D)。京都の書肆、吉田善五郎が刊行した『源氏物語』は本書しか伝わらないため、文中の源氏はこの豆本を指すのであろう。つまり、国会本は双六としてではなく、書物として売られたもので、さらに並製本と上製本があったというのだ。ここから考えるに、早大本が上製、国会本が並製にあたるのだろう。説明書が付された伝本が稀であるのは、豆本として売られたものが含まれているためでもあろうか。吉田による出版物は管見の限り本書が最も古く、その後は寛政元年 [1789] まで活動が確認できる (『琴の組唱歌集』)。なお、本書と『当世智慧鑑』(刊年不明、東洋文庫蔵) 以外に単独版はなく、刊行数も多くないことから、書肆としての体力は長くは持たず、一代もしくは二代で廃業したものと考えられる。刊記が削られたのは、その活動が確認できなくなる江戸時代後期のことであろう。ただし、1 冊わずか 5 丁で毎半葉 5~6 行と内容が少ないことから、書物というよりそれに似せた玩具に近い。また、無刊記である鶴大本の刷りもそれほど悪くはないため、そもそもは双六の駒として作られたのだと考えられよう (加藤)

【図 A】 鶴見大学図書館蔵『源氏物語双六』

「源氏双六うちやうの事／かちまけの事」

【図 B】 早稲田大学図書館蔵『源氏物語』第 28 冊末の刊記 (同上)

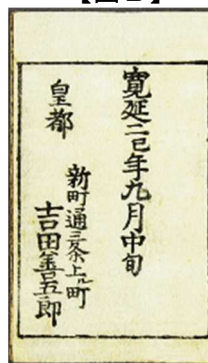
【図 C】 早稲田大学図書館蔵『源氏物語』第一冊目の表紙 (文庫 30/A0015*中野幸一旧蔵)

【図 D】 国立国会図書館蔵『源氏物語』桐箱の蓋の裏面 (本別 13-18)

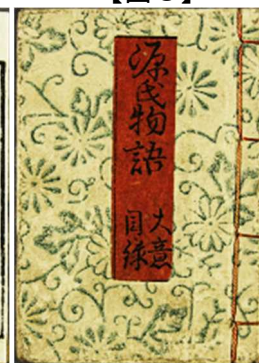
【参考文献】 高田信敬解題『第 133 回貴重書展

示 大学創立 50 周年記念 源氏物語のあそび』(鶴見大学図書館、2013 年) 他、貴重書展図録 (凡例参照)

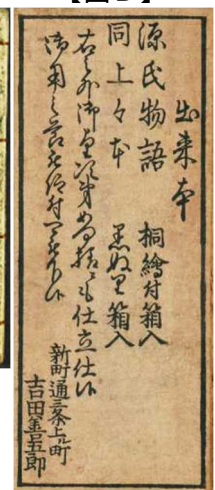
【図 B】



【図 C】



【図 D】



[参考8] 『そのゆかり源氏寿古六』豊原国周画 1 舗 文久3年[1863]刊 (江戸、亀遊堂)

[参考9] 『東京之花源氏双六』歌川芳虎画 1 舗 明治4年[1871]刊 (東京、万屋孫兵衛)

額装の双六2点は、多色摺の飛び双六(廻り双六に対し、賽子を投げて出た数字のコマに飛ぶ双六)。

『修紫田舎源氏』の影響下に流布した「源氏絵」の一で、各図に『源氏物語』の巻名を記す。源氏絵の系譜が、幕末・明治期にまで受け継がれたことが窺える。色味の違いにも時代相が表れている。(神林)

29 『〔狂歌師等扇面寄合書〕』大田南畝・山東京伝・鹿都部真顔・浅草市人・初代烏亭焉馬・窪俊満・三陀羅法師・菊池五山詠、鋏形蕙斎(北尾政美)・柳々居辰斎画

〔文化5年[1808]〕写(自筆・自画)軸装1軸 *箱入。

狂歌師、漢詩人、浮世絵師等10名による扇面への寄合書。地紙は雲母引きで天地に金縁が施される。扇面に折り目がくっきり残ることから、当初は扇の状態であったと推察される。また、各書の配置や割合から、最初に扇面へ書き入れたのは、江戸時代後期の文人として名高い蜀山人(大田南畝)であったと推定される。年時に関する記載は見られないものの、記されている南畝の狂歌が自身の還暦を詠んでいることから、文化5年[1808]に成立したものと考えられる。なお、同狂歌はのちに『千紅万紫』(文化14年[1817]刊)に収載され、さらに年齢を「七十」に変えたものが南畝肖像画の画讃に残される。南畝をはじめ、その弟子の鹿都部真顔や浅草市人、戯作者の初代烏亭焉馬や浮世絵師で戯作者の窪俊満、狂歌師の三陀羅法師による狂歌6首のほか、山東京伝の発句や、菊池五山の漢詩が記される。さらに、浮世絵師の鋏形蕙斎や葛飾北斎門人の柳々居辰斎による淡彩画が添えられる。いずれも南畝と親しい交流が知られる人物ばかりであることや、狂歌や画に鶴や亀といった祝いの景物が見られることなどから、文化5年3月3日に南畝が自邸で開催した、自身の還暦を祝う宴で書かれた可能性も考えられよう。この祝宴の詳細は未詳であるが、記録によれば、扇面にも描かれている三味線弾きが呼ばれたことや、狂歌に詠まれている鎌倉海老(伊勢海老)が振る舞われたことが確認できる(『一話一言』巻44)。(加藤)



【翻字】* () 内に通行の名前と文化5年時の年齢を記した。

〈扇面上段右から〉

- (1) 風そよぐ小河飛越暑さには 逃ても恥に檜の下蔭／真顔(鹿都部真顔 56歳)
- (2) くひつぶす六十年の米つぶの 数かぎりなきあめつちの恩／蜀山人(大田南畝 60歳)
- (3) 自由さは先鍋掛てたきゞこる 鎌倉えびを釣に出る蟹／市人(浅草市人 54歳)
- (4) 一曲想者憐不知心属誰／五山(花押)(菊池五山 40歳)
- (5) 〔三味線を弾く女の画〕／蕙斎筆(鋏形蕙斎 48歳)
- (6) さくや花天女も雲の中の町／京伝(山東京伝 48歳)

〈扇面下段右から〉

- (7) 〔花菓と折鶴の画〕／辰斎(花押)(柳々居辰斎 年齢未詳)
- (8) 恋人に逢ふも首尾よき折鶴の たゞみかけてはいはれぬぞうき／焉馬(初代烏亭焉馬 66歳)
- (9) うち合す水の江の浦鳴人は 亀の山にて松魚つるらし／俊満(窪俊満 52歳)
- (10) 世中の実ある宿を尋れば 義理にてもよくものくれる人／三陀羅(三陀羅法師 77歳)

【参考文献】『蜀山人 大田南畝——大江戸マルチ文化人交遊録——』(太田記念美術館、2008年)、浜田義一郎編『大田南畝全集』全20巻・別巻(岩波書店、1985~1990、2000年)

凡 例

1. 書目一覧は、原則として書名、著者名、書型・装訂、巻冊数、刊写年（刊写者）の順で記し、特記事項は「*」以降にまとめた。
2. 編著者が未詳の場合は、著者名欄を省略した。
3. 合巻は巻数ではなく編数を記した。
4. 列帖装・軸装・晷物・原稿用紙の場合は、巻数欄を省略した。
5. 原則として袋綴である場合は書型を記し、それ以外の場合は装訂を記した。
6. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
7. [] は推定記載に付した。
8. 『源氏物語』の巻名は通行の表記に統一した。例)「もみぢの賀」→「紅葉賀」
9. 漢字は通行の字体に統一した。
10. 本展示における時代区分は以下の通りとした。
江戸初期…慶長～寛永[1643]、江戸前期…正保～元禄[1703]、
江戸中期…宝永～天明[1788]、江戸後期…寛政～天保[1843]、江戸末期…弘化～慶応
11. 解題執筆や出展書目を選出する際には、本学で開催された以下の展示図録を参照した。
 - ・『芸林拾葉 鶴見大学図書館新築記念貴重書図録』（1986年）
 - ・『大学院文学研究科開設記念 鶴見大学図書館蔵貴重書展目録』（1989年）
 - ・『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』（1994年）
 - ・『学校法人総持学園創立 80周年記念 和歌と物語 鶴見大学図書館蔵貴重書 80選』（2004年）

展示担当者

* 教員院生別の五十音順。数字は担当書目の番号。

- かとう ゆみえ
加藤 弓枝（ドキュメンテーション学科准教授）*01～05、09、11、28～29、参考1～2
- かんばやし なおこ
神林 尚子（日本文学科准教授）*16～27、参考7～9
- たぐち のぶゆき
田口 暢之（日本文学科講師）*06～07、10
- まつもと あやこ
松本 文子（日本文学科教授）*13～15、参考6
- うみの ありさ
海野 亜理沙（博士前期課程日本文学専攻2年）*12、参考5
- すずき いくみ
鈴木 郁未（博士前期課程ドキュメンテーション専攻1年）*08

ホスターデザイン

いくら ふみと
伊倉 史人（ドキュメンテーション学科教授）

謝 辞

本展示の開催ならびに解題の編集にあたり、図版の利用をご許可くださいました下記機関の皆様へ、ここに記して深謝申し上げます。そのほか、ここにお名前を掲載することを差し控えております皆様にも、心から謝意を表します。（五十音順、敬称略）

九州大学附属図書館	国文学研究資料館
国立公文書館	国立国会図書館
東京都立中央図書館	早稲田大学図書館

第 152 回貴重書展
日本近世文学会大会開催記念展示
江戸の出版と写本の文化

発行日 令和元年[2019]6月8日 第1版

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2丁目1-3